立命館大学大学院文学研究科

博士論文審査要旨

溝 \Box 万 子

ア・ アーレント プリオリな綜合判断はいかにして可能か 『精神の生活』 三部作の崇高と根源的時間

学位の種類 (文学)

授与年月日 二〇〇八年三月三十一日

審 査 一委員

主査 服 部 健

副査 日 下部 吉 信

副査 松 Щ 壽

論文内容の要旨

作用、 部、 カントの三批判の独特な配置、 する『カント政治哲学の講義』 の講義』 (Human species) 的に読解しようとする試みである。その際論者は、『カント政治哲学 本論文は、ハンナ・アーレントの『精神の生活』三部作 |人間| には 第二部 意志作用、 』第四講末尾に掲げられた人間にかかわる事象の三分類― 「人類 『実践理性批判』 「人間」(Man)、「人々」(Men) ―に対応させられた 第三部 判断作用)を未完の第三部のテーマに関連 つまり「人類」には での構想力をめぐる議論を手がかりに統 と『純粋理性批判』、「人々」には 『判断力批判』 (第一部 思考 判

> 循環に自己を投げ入れることが求められていると主張する。 させる作用 れており、 断力批判 そのため、 第一 (re-presentation 再―現前作用)によってテキストの解釈学的 部、 という配置に、崇高というある特殊な事柄が秘 読者はその構想力、つまり現存しないものを現前

に基づき解明するものである。 から構成され、 (1)」「第二章 カントによる解釈_ アーレントの 『始まり』としての崇高」「第三章 『精神の生活』をアーレントのカント解釈 は 第 章 カント三批判書の再構成 自然の秘かな計略

第一部

判断 が求められているとするのである。 身の同意において自己を律しつつ、人々として共同体の一員として人類 に指令された根源的契約、世界市民的状態を実現するよう行為すること と主張する。「一者のなかの二者」(アーレント)としての人間が自分自 為の格率と注視者の判断の基準を統一していくことによって解決される うアンチノミーが成立することをのべる。このアンチノミーは、 上げ、戦争を崇高とする注視者の判断が道徳的実践的理性に反するとい 決する。同時に『判断力批判』第一部での行為者と注視者の関係を取り にならって、一方を現象界での真理、 してこのアンチノミーをカントの 史の目的 を「歴史の目的(計略)」と読み替え、歴史の主体としての「人間」 批判』第二部についてのアーレントの記述に基づき、「自然の目的 いないその第二部を秘匿されたものとみ、分類表の「人間」と 批判』第一部を重視してきたのに対し、論者はわずかにしか触れられて 「歴史の目的」という超感性的基体を導入し、それに向けて行為者の行 その際、 (判定) するためにテキストに隠されている感性的に把握できな (計略)」に従属するという歴史のアンチノミーを引き出す。 従来のアーレント研究が上記の分類表の「人々」 『純粋理性批判』 他方を物自体界での真理として解 の第三アンチノミー と 判 『判断力 (計略)」 それを が 断力 そ

を提出している。 断によって公共的共同体(法)が成立すると論じる方向とは異なる視点 ではないという点を強調するアーレントの指摘に着目することによっ が対立するとき犠牲になるのは天才であるが、天才が趣味能力を欠くの が対立するとき犠牲になるのは天才であるが、天才が趣味能力を欠くの

ものへ!」「第二章 て間接的に証明するものである。 はアーレントのテキストに隠された崇高な出来事を読解するために、第 としての崇高」「第四章 一部で論究された内容を、 第二部 ハイデッガー、カントによる解釈」は カント三批判書の再構成 (2)」 『始まり』と無」から構成されている。 ハイデッガーの存在論を援用することによっ 第一 第三章 章 事象その 『始まり』 第二部

崇高な出来事とそれを創始する絶対的な始まり、時間性と構想力の問題 どを援用して、 象学であると特徴づけ、 在としての現存在が存在を先行了解している予構造(予持、予視、予握) した秘匿されたものを読み取るために、論者はハイデッガーの世界内存 たアーレントのテキストをそのような存在そのものと位置づける。 を示さないもの(存在)を、それ自身のほうからみえるようにさせる現 一者のなかの二者」という良心の問題などを再論する。 論者は、ハイデッガーの存在論が、 道具的存在者に対する配慮的気遣い、 あらためて、 『判断力批判』第二部や崇高な出来事を秘匿し 三批判書の再構成、 秘匿され変装した姿でしかおの 現存在の時間性の分析な アンチノミーの問題 そう n

る、そういう判断作用を行う、あるいは新しい出来事を創始する天才的が戦線から離脱し時間の外に存在し、歴史の流れを中断し歴史を判断すめたてられるカフカの『彼』のアフォリズムに対して、第一部では、「彼」たとえば、アーレントが背後(過去)と正面(未来)の二人の敵に攻

却の穴に沈められた犠牲が取り返されることになる。 り自分の実存可能を伝承された現存在の了解可能から取り返すという時 されていた。 に該当すると指摘され、崇高がテキストで秘匿されていた証左の一つと 「テンペスト」が『判断力批判』での力学的崇高の例とされた「大暴風 ンペスト』の船の難破と溺死したはずの父を弔う聖譚曲は、 あるいはまたアーレントが説明なしに引用していたシェークスピア『テ に身を投げ入れることによって、取り返され顕わになるというのである。 不正と判断された行為者という秘匿されたものは、 になる。 間性論が援用されることによって、秘匿されたものが顕わにされること の同じ隠喩がハイデッガーの時間性論、つまり死への先駆的決意性によ 行為者の超越論的構想力の時間性として解読されてい つまり趣味判断によって犠牲に供された天才や注視者によって しかし第二部では、これも同じく先駆的決意性によって忘 読者が解釈学的 第二部ではこ 第一部では 循環

の主張、 界市民的体制を目指すことであるという。 匿された特殊な出来事を顕わにさせることが、 めたものである。反省的判断力の構想力の働きによって、テキストに秘 り上げたヘルダーリンの詩の引用などをもとに、これまでの結論をまと 第三部 共同墓地を意味する「永遠平和のために」、 船の隠喩」は、シェークスピアやカフカ、 死 への決意を秘めつつ世 ハイデッガ カント 0) 訪問] が取

論文審査の結果の要旨

研で2時間にわたって、約15名の参加により公開で行われた。 本論文の審査は、二〇〇八年七月二十六日午前11時より学而館第一共

活』三部作にみられるように、彼女自身の生き方に適合する形で次第にントが判断作用を活動的生活の観点から考察する立場から、『精神の生『カントの政治哲学講義』を編集したロナルド・ベイナーは、アーレ

立命館大学大学院文学研究科博士論文審査要旨

る。 文の着眼点は、 やシェークスピアの作品について論者がカントやハイデッガーに依拠し ると評価できる。またそうした視点から、アーレントが引用したカフカ 代表されるようなアーレント解釈とは異なる新しい視点が提出されてい と人間と人々とを統 隠された崇高を顕わにする構想力の働きを強調することによって、 となく指摘したことに基づいて、天才論の復権をはかるのである。また、 るのではなく、 没利害的な注視者の観点から考察する立場に移ったと述べている。 て示した読解は説得力をもつものであった。 しかも天才と趣味判断、 行為者や天才にみられる崇高な出来事を復権しようという試みであ そうした注視者や趣味判断によって隠蔽された犠牲とし 天才が趣味判断を欠くわけではないとアーレントがそれ 一的に読解する可能性を論じてもいて、 行為者と注視者を二元的に対立的にとらえ ベイナーに 人類 本論

問題が出され議論された。 しかしながら本論文にはいくつかの問題点も残っており主として次の

では人類の進歩と個人の尊厳の矛盾が指摘されていることに見られる。 歴史観への批判とともに、 トの場合そうした歴史の進歩を疑わせるような事件の責任者の 優位によって文化の進展や人類の進歩が成立するのに対して、 観との差異が看過されるのではないか。なぜならカントでは趣味判断の ないか。 を考察しているアーレントの歴史観とカント的な人類の進歩という歴史 (治哲学の講義) るからである。 ダヤ民族という立場からも距離をとって判定できる立場が模索されて 第一に、 そのことによって、 論者はアーレントのカント読解とカントとを同一 天才と趣味判断の結びつきを指摘し天才論の復権を図るとい 末尾にヘーゲル的なミネルヴァの梟としての哲学観 実際アーレントのカントへの批判的留保は、 『判断力批判』にみられるカント的政治哲学 アイヒマン裁判をきっかけとして判断作用 視しては アー **『カント** 一人を、

との重要性については従来の研究もその意義を認めるからである。戦争を崇高とみる注視者の没利害的な判断が歴史に対して距離をとるこなら従来の研究が崇高を無視しているとするのは早急な批判であろう。なぜと天才との結びつきで解明していく方向を可能にするものであろうが、ら点は、新しいことを始めるというアーレントの「活動」概念を多数者

三六

困難にしている。 用された諸用語がそのもともとの意味を離れて使用されており、 ŋ 卜 0) 目的 のテキストに擬するなど、アーレントのテキストを解読するために援 第三に、本論文ではカントのいう超感性的基体として、 また存在と存在者を厳格に区別するハイデッガーの存在をアーレン (計略)」 が、さらには崇高や産出的 超越論的構想力が扱わ 最初に 理 歴史 れた

ついて質疑がなされ、次の評価に達した。四、第五の問題として指摘されたが、各委員の質問と重なる上記三点に四、第五の問題として指摘されたが、各委員の質問と重なる比題三点に

カの 説得力をもたせることができた。 0) は全委員から指摘された。 が使用した各哲学者の用語が本来の意味から離れて使用されていること ントが引用したシェークスピア『テンペスト』の難破船の聖譚曲 来のアーレント研究では見落とされがちであった問題を展開し、 ガ 0) 独自性は認められる。 テキスト解読を主張する論者と各哲学者の用語の厳密な理解を求める ーの諸著作を渉猟して、 本論文のアーレント解読に審査員全員は同意できなかったが、 彼 のアフォリズムなどの読解においては、 また論究に当たってカント、ヘーゲル、ハイデッ この点をめぐる議論を通しても、 それらの方法や用語を批判的に援用して、 しかし、 アーレント解読のために論者 その着眼点に一定の 隠喩として アー 着眼 カフ

れたが、委員会としては次のように評価した。副査(松山)からは、最終的評価を他の委員に委ねるという意見も出さ審査員との隔たりを埋めることはできなかった。この点を特に指摘した

本論文が果たしてアーレント哲学の正当な解釈として是認されるかど 本論文が果たしてアーレント哲学の正当な解釈として是認されるかど にアーレント解釈であり、ユニークさの点では注目され、一定の水準を にを欠くことになろう。以上の観点から本審査委員会は本論文を博士課 正を欠くことになろう。以上の観点から本審査委員会は本論文を博士 にを欠くことになろう。以上の観点から本審査委員会は本論文が、こ 本論文が果たしてアーレント哲学の正当な解釈として是認されるかど 本論文が果たしてアーレント哲学の正当な解釈として是認されるかど おいる。 むしろ読み込み過ぎているのである。 哲学は信念の対決である。 にを欠くことになろう。以上の観点から本審査委員会は本論文を博士課 正を欠くことになろう。以上の観点から本審査委員会は本論文を博士課 本論文が果たしてアーレント哲学の正当な解釈として是認されるかど おいるのである。

試験または学力確認の結果の要旨

に博士(文学 立命館大学)の学位を授与することを適当と認める。 おける英語、ドイツ語の諸文献の引用などから、十分な外国語能力を備 えていることが明らかであると判断した。以上の点と、本論文の評価を えていることが明らかであると判断した。以上の点と、本論文の評価を 清 (『立命館文学』一篇、『立命館哲学』二篇)などから、十分な外国語能力を備 申請者溝口万子については、入学時の学力試験、これまでに発表した

琴

孫

[・]加齢に伴う認知機能の変化に関する研究

−抑制機能を中心とした検討−−

学位の種類 博士(文学)

授与年月日 二〇〇八年三月三十一日

審查委員

主査 吉 田 甫

副査 星 野 祐 司

査 土 田 宣 明

副査大川一郎

論文内容の要旨

本論文は、加齢に伴う認知発達、その中でもとくに抑制機能を中心にしてその発達的変化を検討し、併せて発達的変化に対する介入をもおこは、これらの実験をまとめたものである。第1章では、これまでの認知発達、接をおこない、以下に要約したような結果を得ている。最後の第3章では、これらの実験をまとめたものである。第1章では、これまでの認知発達、最後に今後の課題も指摘されている。

レビューしている。加齢に伴ってさまざまな認知機能は、一般に低下す第1章では、加齢、とくに認知機能の変化に関わるもろもろの研究を

る。 る。 い 捉えている機能の内容にあることを指摘している。 があることも示唆している。 焦点があてられていることを批判し、 もあるし、また機能が発揮される領域によっても、さらには個人によっ で展開する研究の方向性が示されている。 イデアを引き出している。これらの問題点の指摘の上に立って、 きく活性化する認知的課題に関する最近の研究を基にして、 される研究があることに着目し、その違いは抑制機能を評価する課題が く受ける機能であるが、 注意機能というそれぞれの機能別に、 ても大きく異なる。これらの側面を記憶機能、 年齢で低下するものもあれば、 記憶機能では、 、ては、 かしその低下は、 最新の脳イメージングの研究を引用し、 これまでの研究がとくに低下する側面だけに研究の しかし研究によっては低下というよりは、 すべての機能で一様に生じるわけではない。 抑制機能も、 かなり遅い年齢になって低下するもの 加齢とともに発達する記憶の側面 これまでの研究をレビューしてい 基本的には加齢の影響を大き 抑制機能、 また、 前頭前野 前頭葉機能に 前 本研究のア の機能を大 頭 菜機能、 本研究 維持 早

異なる実験協力者ではなく、 が議論されてきた。 毎にそれぞれ異なる対象者についての検討を行い、それぞれの抑制機能 ている。これまでの研究では、 経路とも対応している。 についての加齢差が異なると指摘されてきた。この問題は、 に分類して、それぞれ毎に加齢変化を検討してきた。そのさいに、 2 2 まず2章の1節では、 0) 経路を通って前頭前野に送られてきた情報に対する反応の抑制 それぞれ異なる実験協力者を対象として、 本研究においては、 いわゆる背側経路と腹側経路の違いである。 第1の機能差による低下の違いについて検討 同 抑制機能を同一性ベースと場所ベースと の実験協力者を対象として、 その加齢による影響の違いを 加 齢の影響の違い 情報 実証して 処理 機能

る

能の変化が、 常範囲の に、 様々な場面で重要な役割を果たしているであろう反応の抑制機能を中心 病 的加齢による変化を検討している。 2章の2節では、 正常範囲 加齢においては、 病的な加齢において、はっきりと実証してい の加齢変化と、 さらに正常な加齢変化ばかりでなく、 変化が明確ではなかった場所ベースの 病的な加齢変化の違いを明らかにした。 本研究では、 日常生活にお 認知症 温などの 制 正

三八

持改善の問題にまで踏み込んだ検討がなされた。このような実践的 テーションという、 機能について、 究の中で、これまで機能の衰退面ばかりが強調されてきた高齢者の が主流である。 達研究では、青年期との比較を通して、認知機能の衰退面に関する研 おいては、 ンを通じての抑制機能の可塑性の問題にまで言及している。 2章の3節では、 当然、 しかし、ここに報告されている実験では、 機能の維持回復の可能性を示すことができている。 機能の低下の問題が中心に検討されることが多い。 長期間に渡る実践的な取り組みを通じて、 機能の低下面ばかりでなく、 認知リハビリテー 認知リハビリ 加齢変化 機能 ・ショ な研 の維 発

摘されている加齢の影響を受けやすいことに同意している。 このように、 が 研究では地道なデータ収集により、多くの実験協力者の参加をえること うな事情から、 いを問題にすることが多い。 分けて分析し、 ースと場所ベースの抑制機能の加齢変化の違いがより明確になっ 般に発達研究においては、 でき、 2章の4節の実験4と5では、 3章では、 高 齢者の中での比較的短いスパンでの加齢変化を検討できた。 これらの結果を総括し、 比較的短いスパンでの加齢変化を検討することで、 大きな加齢変化の問題として捉えることが多かった。 前期と後期高齢者間の差に関わる結果を報告している。 多数の実験協力者の確保の難しさというよ 高齢者を対象にしたときは、 加齢変化を前期高齢者、 抑制機能の発達が従来の研究で指 青年期との違 後期高齢者に かし加え 同

されており、今後の研究の展開が大きく期待される。指摘している。またその発達の変化に関わる仮説的なメカニズムも提案て、介入によってその加齢の影響を最小限に小さくすることも可能だと

論文審査の結果の要旨

名の合議による総合所見を以下に述べる。末川会館第二会議室において、公開で行われた(傍聴者7名)。審査員4末船文の審査は、二○○八年六月二十七日午後3時半より約2時間、

明らかにした点である。 そこでの発達を明らかにしている。いずれも、これまでの研究では見い 高齢者の加齢の過程をも明らかにしている。第3には、 関与する機能の違いに着目し、 ない低下をかなり詳細に検討し、これまでの研究で大まかに捉えられて な地平を切り開いた点は、 だされていない結果が得られており、 または向上されることをも明らかにした。第4に、先行研究で高齢者と ては低下のみが強調されることが多いが、この低下が介入によって維持 いる。本研究の大きな特徴は、主に4つある。まず第1に、 いた側面を細かく分類することで、発達の過程を明らかにしようとして いくつもの側面を指摘し、それらの指摘を基にして5つの実験をおこな 一括されていた対象者を前期高齢者と後期高齢者とに分けて、 著者の研究は、これまでの研究で不十分にしか検討されてこなかった 新たな知見を見いだしている。この研究では、抑制機能の一様では 第2に、 大いに評価できる。 機能によって低下の諸相が異なることを 健常な加齢の過程だけでなく、 加齢に伴う抑制機能の発達に新た 加齢研究におい 抑制機能に

かも介入研究もおこなうという幅広い内容となっている。このため、そ高齢者から認知症という病気をもつ高齢者まで多岐にわたっており、しただ、いくつかの問題点も指摘された。第1に、実験協力者が健康な

まいさが残るために、考察が不十分なところが散見される。れら実験間の論理の展開がややあいまいである。第2は、そうしたあい

ることが確認された。 は、博士論文として十分なレベルに達していしかしながら、基本的には、博士論文として十分なレベルに達してい

試験または学力確認の結果の要旨

ふさわしい語学力を備えているものと判断される。 況およびこれまでの発表論文、学会発表などから判断して、課程博士にに関して問題となるところはない。博士論文の参考文献やその使用の状博士論文の公開審査における質問に対する答えは、的確であり、学力

と認める。 条第一項により、博士(文学 立命館大学)の学位を授与することを適当条第一項により、博士(文学 立命館大学)の学位を授与することを適当当審査委員会は、以上の点を総合的に判断して、本学学位規程第十八

對 梨 成

『坂道の傾斜知覚の研究』

学位の種類 博士(文学)

授与年月日 二〇〇八年三月三十一日

查委員

主査 東 山 篤 規

副査尾田政臣

副查北岡明佳

☆大内容の要旨

の要因を明らかにすることに向けられている。の関心は、視環境側の要因(目に入ってくる包囲光パターン)と観察者側の関心は、視環境側の要因(目に入ってくる包囲光パターン)と観察者側のような実際の坂道や階段を念頭に置いて、その見かけの勾配に影響すわれわれは毎日のように坂道や階段を歩いているが、この論文は、そ

には、 て、 坂道や階段の縮小模型が作成され、それを被験者に観察させてその見か さと形状、 坂道あるいは階段の見かけの傾きに影響すると思われる視環境要因とし けの勾配を測定し、 両眼視と単眼視、 論文は6章から成り、全体で11実験が報告されている。 道路の側壁模様 分度器に取り付けた2針の間隔を用いて勾配の程度を表現する 坂道の複合性などを操作し、 視野の大きさ、目の高さなどを操作している。測定法 データに統計処理を施して議論が進められている。 (ガードレール、 垂直水平パターン)、 観察者要因として、足場の傾き、 道幅、 どの実験でも、 坂道の長

> 調整法を用いている。 マッチング法と、水平方向に一致するまで坂道自体の位置を変化させる

ている。 傾斜知覚に関する短い研究史と用語に関する説明を行っ

坂道を水平と感じ、 た。擁壁の高さと被験者の足場の傾きの効果は有意でなかった。 水平と感じた。この効果は、 れた。擁壁模様に関しては、視覚パターンを上り方向に描くと、上りの に影響するが、 ターン) りまく矩形の実験室全体の傾斜と、 き方向の勾配)に及ぼす視環境の効果をおもに扱っている。 第2章 の傾斜を操作したところ、 (実験1-3) では、 実験室全体を傾斜させた条件に対して大きな効果が得ら 反対に擁壁模様を下り方向に描くと、下りの坂道を 傾斜角約10のパターンに対して最大となっ 一定の勾配をもった単坂の縦断勾配 いずれの条件も坂道の見かけの勾配 道路の左右の擁壁模様 観察者を取 (垂直水平パ

確認した。この結果より、 けの勾配を測定し、 は有意でなかった。 くびれ率の増加によって生じると解釈した。視野の大きさや濁りの効果 レール、視野の大きさ、視野の濁りなどを独立変数にして、 り、上りの近坂が下りに見える原因を明らかにしている。 るとする従前の観察結果から、 テリー現象(上り坂を下り坂に知覚する。その逆の場合もある) 第3章(実験4-7)は、近坂と遠坂とからなる複合坂においてミス 狭い道幅に対してミステリー現象が得られることを 申請者は、ミステリー坂は、 四国の屋島にある複合坂の縮小模型を作 複合坂サグ部 道幅、 が認められ 坂道の見か ガード

くに単眼観察のもとでは、末広がりの道路は勾配がきつく、先細りの道もっとも影響力のある要因は道路の形状(末広、平行、先細)であり、と両眼・単眼性、近坂の可視性の関数として検討されている。実験の結果、第4章(実験8)では、複合坂の遠坂の見かけの勾配が、道路の形状、

配に影響しなかった。 路は勾配が緩やかに見えることが示された。近坂は、遠坂の見かけの勾

に影響する要因を明らかにしている。実験では、坂道あるいは階段の横 雑な交互作用が示されたが、 断勾配、長さ、整列・斜列などの条件を変化させた縮小模型を作り、 定の縦断勾配をもつ単坂と階段がつくる見かけの横断勾配 設された階段の踏面が、 てきわめて単純にして明快に説明した。 の見かけの横断勾配を測定したところ、 第5章 (実験9-11) では、 左右方向に歪んで見えることに触発されて、 申請者は、 申請者は、 この結果を「横断成分」によっ 面特性、 埼玉県西武秩父線正丸駅に敷 長さ、 列特性の間に複 (左右の勾配 そ

ている。 第6章は、本論文に収めた実験の結果をまとめ、その英文要約を与え

論文審査の結果の要旨

学而館第一研究会室で行われた。傍聴者4名。本論文の審査は、二〇〇八年七月一日午後1時30分より3時15分まで、

段を、横断成分によって簡潔に説明できたことは、高く評価される。ない、包括的に解明したことである。とくに、正丸駅の歪んで見える階の、包括的に解明したことである。もうひとつの特長は、3次元空間から的・包括的に解明したことである。もうひとつの特長は、3次元空間から的・包括的に解明したことである。もうひとつの特長は、3次元空間からかを援用して、投影射角、くびれ率、横断成分、階段の仮想面など独自の幾何学用とて、投影射角、くびれ率、横断成分、階段の仮想面など独自の幾何学用とで、投影射角、くびれ率、横断成分、階段の仮想面など独自の幾何学用とで、大変を表示したことである。とくに、正丸駅の歪んで見える階級を、横断成分によって簡潔に説明できたことは、高く評価される。本論文の特長は、これまで十分に研究の光があてられなかった坂道の本論文の特長は、これまで十分に研究の光があてられなかった坂道の本論文の特長は、これまで十分に研究の光があてられる。

いま少しの深慮を求めたいところがある。そのひとつは、申請者は実験本論文では、豊富なデータに基づいた確かな理論が展開されているが、

立命館大学大学院文学研究科博士論文審查要旨

視などの関連領域への言及がなかったり、 困難であるとするが、 この理由を申請者は、 成果が認められる。 文全体の評価を損なうほど大きなものではなく、 て再考あるいは補足を必要とする箇所が散見されるものの、 正確な読み取りがなされていなかったりする。もちろん、このようにし どにケアレスミスがある。さいごに、多くのデータを提示しながら、 るところが気になる。 が不十分であったり、 肯定につながらない。 ミステリー坂については、 結果の多くを投影射角によって説明するが、上り坂が下りに知覚される この種のミステリー坂を投影射角で説明するのが また、数式、数式を表した図、 現実離れした位置から道路を観察させたりして それに、実験操作において、 投影射角効果の否定が、ただちにくびれ率効果の 複合坂サグ部のくびれ率によって説明する。 現象の綿密な観察やデータの 博士論文として十分な 視野の白濁度の記 引用文献の表記な それは、

試験または学力確認の結果の要旨

容の充実を証明している。 による要約が付記されており、 本心理学会から2006年度優秀論文賞が授与されており、 本論文第5章にほぼそのままの形で記載されているが、これに対して日 面が傾いて見える錯視の実験的解明」心理学研究、2005年76巻第2号) ると判断される。 題はない。本論文およびその参考文献として提出された論文には、 後の審査者による質問に対する受け答えは的確であり、 本論文の公開審査において、 また、この参考文献のうち最初の文献 課程博士にふさわしい語学力を備えて 申請者が行った要旨の発表、 学力に関して問 (「階段の平面踏 その研究内 およびその は、

項により、博士(文学 立命館大学)の学位を授与することを適当と認める。本審査委員会は、以上の点を総合的に判断して、本学学位規程第十八条第

石上阿希

『近世期春画・艶本研究の一試論』

学位の種類 博士(文学)

授与年月日 二〇〇八年三月三十一日

查委員

主査 彦 坂 佳 宣

副査 中 西 健 治

副査 赤 間 亮

論文内容の要旨

提出論文は、以下に示す全四章と資料編とからなっている。

序章

一節 西沢一風作『好色極秘伝』考

表現媒体としての艶本

|西沢

一風

の艶本—

―浄瑠璃段物集・浮世草子との関連―

|節|| ホノルル美術館レインコレクション蔵

第

西沢一風作『風流足分船』について

―初期上方艶本に関する考察―

画作品研究―鈴木春信の春画-

第二章

鈴木春信画「風流座敷八景」考

―画中狂歌の利用と図柄の利用

第三章 艶本の模倣性と多様性

「忠臣蔵もの」の艶本

終章

資料編 リチャード・レイン―春画研究とコレクション―

か、明快な視点が示されている。かから如何に艶本を位置づけるか、さらに艶本の可能性がどこにあるの市民権を得るに至ったかが簡潔に論述されている。近世文化の総体のな「序章」には、本分野の研究史が述べられ、この分野の研究がいかに

草子年表等にみられる本書にかかわる部分の誤謬を正している。 であり、 のできない作品であるとする。これまで部分的な紹介があるのみの資料 た作品であり、 のではないとする筆者の主張の具体的な論証事例となっている。 ての背景が色濃く反映するものであり、艶本が一人独立して成立するも いる。こうした艶本の企画は、 として、その典拠の博捜と発見があり、 世草子などの典拠のある一種のアンソロジイとなっている。 品で、前者には挿絵がなく、色道の指南書であり、 る考察である。 「風流足分船」は、当時の浮世草子の上で流行していた、役者を投影し 次に、 一同じく西沢一風の「風流足分船」 また書名すら諸説あった。それを本論では確定し、 第一章第一節は、 艶本もその流れにあり、 本書は「好色極秘伝」と「丹前枕絵」 新出資料・ 一風の浮世草子作者・浄瑠璃本版元とし の成立過程についての考察である。 西沢一風作 それを詳しい表の形でまとめて 一風の作品研究の上で欠くこと 『好色極秘伝』に関す 後者は、 の二部から成る作 既存の浮世 本節の成果 浄瑠璃や浮 第二節

狂歌を少しずつ改変しており、ここでは伝統的画題に加え、狂歌の改変てその趣向を立てるかを論じている。春信はこれまで典拠とされている特に画中に示された狂歌に注目することにより、制作者がいかに工夫し特に画中に示された狂歌に注目することにより、制作者がいかに工夫し等二章「春画作品研究―鈴木春信の春画―」は、近年、八枚すべての第二章「春画作品研究―鈴木春信の春画―」は、近年、八枚すべての

むしろ後の絵師たちの「座敷八景」への影響の大きいことを紹介する。されていることを具体的に説く。また、この春画である「座敷八景」が、によって企図した男女の物語を組み込むという二重の見立ての工夫が施

とを考察し、その多様な表現方法を論じている。 作者や絵師たちが、時代、演劇、出版の動向などと深く関連しているこ表紙や浮世絵から広く取材している点を詳細に論じたものである。艶本作品の指摘と考察を述べる。演劇の「仮名手本忠臣蔵」だけでなく、黄蔵もの」と目される艶本20作品を対象に、その典拠となったジャンルの第三章「艶本の模倣性と多様性 「忠臣蔵もの」の艶本」では、「忠臣

絵師西川裕信研究の必要性が確認されている。力説する。また、今後の方向として、なお関連する文献の収集・整理とでもあった、近世の他分野との関連、春画・艶本研究の独立した価値を「終章」における各章の要約は綿密かつ詳細になされ、序章での論点

説文が添えられている。である。リチャード・レインの評伝と各作品単位について、要を得た解いるリチャード・レインコレクションの全貌を紹介するカタログの解説は後に、末尾につけたかなりの量に及ぶ資料編は、出版が予定されて

論文審査の結果の要旨

以下の通りである。
て行なわれた。本論文に対する3名の審査委員の一致した見解、評価は時間にわたり日本文学共同研究室を会場として、3名の審査委員によっ本論文の審査は、二〇〇八年七月十一日(金)、午後1時30分から2

価される春画や艶本を対象にし、それに真正面から取組んだもので、本本論文は、我が国の歴史上に現れて、世界でも突出した質を誇ると評

立命館大学大学院文学研究科博士論文審查要旨

分野を学術的にとりあげた初めての博士論文である。

正攻法で挑んだ本論文は、 至ったものである。 リチャード・レイン氏のそれは、ホノルル美術館に収まった。 味で何よりもまずは評価できる。 の春画・艶本の整理を担当する幸運を得て、この博士論文にまとめるに 者は、林美一コレクション、ならびにリチャード・レインコレクション の主要な部分は、本学アート・リサーチセンターの所蔵に帰しており、 ングにおいて可能となったのが当該研究である。なお、林美一氏の蔵書 巨頭が相次いで没し、彼らの蔵書が公的機関に所蔵されるというタイミ きたが、この分野を推進してきた林美一、リチャード・レインという二 の公刊がいわば解禁され、学術研究としても対象にできる時代となって 時にそれが法の裁きの対象にもなってきた。ここ20年来、こうした図像 春画・艶本という分野は、忌避あるいは意識して遠ざける風潮があり、 未だ正当な評価を得ていない春画・艶本類の研究に 分野の特殊性を含めて先駆的であるという意 学位申請

明が必要と感じられる。 対象とするべきだとの言説との整合性のためには、もう少し説得的 るべき方向と、 いることに関連して、 的に提示したことが大きな成果と認められる。ただ、「序章」で述べて る見解を、 文芸全体を見渡すために 「序章」と第一章においては、すでに林美一氏が提唱していた 的確な資料をピックアップし、研究成果として実践的・具体 春画・ 他分野との関連の中でひろく文化史中に位置づけ 艶本をその補完資料としてではなく、 『春画・艶本』は欠かせない分野である」とす 独自の研 江 な説

とは容易に察せられるところであり、この基盤の上にたつ絞り込みの力じられる点がある。しかし、背後に考察材料として大量の資料があるこ新出資料のみで論述しようとしていて、一見、事例点数の上で乏しく感また、第一章の考察に顕著に見られるところであるが、ストイックに

る事例を挙げて欲しかった。

はし、既存の浮世草子年表等にみられる本書にかかわる部分の誤謬を正出し、既存の浮世草子年表等にみられる本書にかかわる部分の誤謬を正出し、既存の浮世草子年表等にみられる本書にかかわる部分の誤謬を正

考察している点は高く評価できる。 やはりその改変によって成った艶本の表現類型を精選した事例で詳細に それの取り込み、また浮世絵の取り込みの模様を詳細に検討し、 様な作者の工夫の跡を、 る点を詳細に考察している。 ないが、江戸時代の狂歌を典拠として巧みに取り入れ、 得力は高いものとなっている。 取上げたことで、ここでも事例が少ないながらも、考察にあたっての説 品品 るなどの点を具体的に指摘している点が評価される。 法を取り込んでいるか、またそれをどう改変し、創造的な面を見せてい いる。「忠臣蔵もの」の艶本についても、多量にある関連する黄表紙の 変を伴わせて、典拠の暗示と改変面の両面が図柄に現れる形になってい でどのように制作されてきたか、作品がどう先行文学・絵画の典拠や手 第二章・第三章においては、「春画・艶本」が他の文芸との交渉の 第三章では忠臣蔵ものを対象にし、これらオーソドックスな素材を 行き届いた考察によって説得的に明らかにして 西川祐信による艶本図柄の利用事例も、 春信作品は、一見しただけでは気付 第二章で春信の作 かつ創造的な改 そして かれ 同 中

術的目配りがなめらかな文体により違和感なく、解説中に取込まれてい評価される。単なる印象批評ではなく、関連資料に対する行き届いた学世界が、これにより的確に確認できるうえ、何よりも作品自体の質の高文の背景にある基本視点と学術的な興味としての筆者の持つ本分野へのリチャード・レインコレクションの全貌を紹介する資料編では、本論リチャード・レインコレクションの全貌を紹介する資料編では、本論

ることも、筆者の力量を感じさせるものとなっている。

四 四

の究明との両方にわたる考察が求められよう。い点は、比較すべき資料をさらに多く提示して、一般的な傾向と個性面え、取上げた資料の量が乏しく、地域・時代にやはり厚みが感じられな背後にある資料の渉猟作業が膨大である割には、精選されているとは言こうした点が高く評価されるが、改善すべき点もある。全体として、

ども工夫がほしかった。細かな点では、第一章第一節の表の整備、「図版解説」の構成方法な

るものである。審査委員の一致した意見として、博士論文として十分な成果が認められや各章の慎重かつ的確な論証など、また数多くの新知見の提出からみて、以上、いくつかの瑕疵は認められるが、考察対象とその内容の先駆性

試験または学力確認の結果の要旨

松 葉 涼 子

演劇及び演劇資料における パターン利用の発想と方法。

学位の種類 士 (文学)

授与年月日 二〇〇八年三月三十一日

審 查 一委員

主査 彦 坂 佳 宣

副査 中 西 治

副査 赤 間 亮

論文内容の要旨

提出論文は、以下に示す四部構成の全七章からなっている。

序章 パターンとは何か

第一部 視覚的パターンの利用

章 演劇におけるやつしの発想―視覚表現の生成と利用

二章 演技パターンの検証―類型的構図と舞台演出

第二部 パターンの変容

三章 長持の演出―『仮名手本忠臣蔵』 十段目における

演技パターンの継承と展開

四章 劇の **『伊勢物語』** 享受―「桂川道行」を一例として―

第三部 パターンの学習

江戸の劇場図―師宣様式の成立とその意義

第四部 上演資料にみる先行作の利用

立命館大学大学院文学研究科博士論文審查要旨

六章 「絵入狂言本」と狂言取り・

七章 「弥作鎌腹」 一の初演

根本『忠臣いろは四十七訓』をめぐって―

終章 作劇の発想

なる用語で規定し舞台におけるその諸相と変容を解明している。 されなかった、視覚的に「類型的な表現」や「構図」を、「演技パターン」 を明らかにしようとするものである。とくに、今までそれが何か意識化 それが歌舞伎を演劇として成立させ、創造する上での力となっている点 性に注目することにより、歌舞伎の演技にはある種のパターンが存在し、 本論文は、 古典芸能の一つである 「歌舞伎」を対象として、 その絵画

があり、そのため、序章において、この用語を定義する。 いう歌舞伎における演技・演劇の単位とされているものとの微妙なズレ このある種の「パターン」は、従来から、「趣向」「型」「事」などと

ンが生れていくとする。 あり、これらが繰返し用いられることで、視覚的に類型的な演技のパター 中には、絵画の画題にあたる表現を「見得」として表現しているものが 藤恵里氏の論考に導かれて確認する。さらに、 し」と作劇手法としての「やつし」の二通りの用法があったことを、佐 るものがあることを踏まえた上で、元禄期にすでに、芸としての「やつ 第一部、第一章では、演劇の「やつし」と絵画の「やつし」に通底す 作劇手法の「やつし」の

な役割を果たしていることを証明している。 技パターン」と定義できたこれらの局面が演劇の創造活動において大き どの局面を具体的に取上げ、その上演実態と変遷の跡を検証する。 の歴史の中で繰返し演技されてきた、「仲裁」「凝視・刀杖」「小袖」な のようなものではなく、名称として決った言い方がないものの、歌舞伎 第二章では、すでに演技用語として定着している「髪梳」や 「草履打

していくのかの過程を詳述する。
したか。また、それが、類型化していった上で、さらに他の作品を創出技パターン」を確認した上で、それがどのように持込まれ、場面を形成用連理柵』という歌舞伎の代表的な二つの作品を取上げ、それぞれの「演用主書、第三章・第四章では、それぞれ『仮名手本忠臣蔵』十段目、『桂

る。 第三部、第五章は一転して、演劇の舞台図を生み出してきたことを述べ を全面に出すことにより江戸独自の舞台図を生み出してきたことを述べ を全面に出すことにより江戸独自の舞台図を生み出してきたこ とを述べる。特に師宣作品が、上方版本の劇場図に倣いながらも、「猿若」 とを述べる。特に師宣作品が、上方版本の劇場図に倣いながらも、「猿若」 とを述べる。特に師宣作品が、上方版本の劇場図に倣いながらも、「猿若」 とを述べる。特に師宣作品が、上方版本の劇場図に倣いながらも、「猿若」 を全面に出すことにより江戸独自の舞台図を生み出してきたことを述べ を全面に出すことにより江戸独自の舞台図を生み出してきたことを述べ を全面に出すことにより江戸独自の舞台図を生み出してきたことを述べ を全面に出すことにより江戸独自の舞台図を生み出してきたことを述べ

四十七訓』とその関連の台本を調査することにより、 について、渥美清太郎による解説が通説となっている点に疑問を呈す。 章では、 趣向取り」される「演技パターン」に相当するものであるとする。 存在することを以って狂言本の資料的な価値を云々されてきたが、そこ が、これも そして、ほとんど研究の進んでいない絵入根本の一つ『忠臣いろは から発想を転換し、版本において流用される内容がそのまま「狂言取り た論考である。第六章は、 第四部、 現在もまれに上演される「忠臣蔵」 第六章・第七章は、 「演技パターン」を考察の単位とした場合に解明される事例 従来、 演劇上演文献の書誌学的な調査に基づい 狂言本の中に板木の流用も含む剽窃が 書換物の一つ「矢作鎌腹 渥美の錯謬を正す 第七

れた上で、全体のまとめを行っている。終章においては、歌舞伎研究における絵画資料活用の現状について触

論文審査の結果の要旨

四六

りである。
て行なわれた。本論文に対する3名の審査委員の見解、評価は以下の通間にわたり、日本文学共同研究室を会場として、3名の審査委員によっ間にわたり、日本文学共同研究室を会場として、3名の審査委員によっ

指摘された。
従来、歌舞伎の特徴として絵画性に満ちていることについては、一般指摘された。

旨がより闡明となる可能性がある。パターン」の定義にこの視点からの説明が付け加えられれば、筆者の論ンとしての「見得」と絵になるという意味の「見得」があるが、「演技また、歌舞伎における「見得」の意味については、ストップモーショ

伎史側における資料の博捜、 も指摘されたが、実際、 査の不徹底、 気で上演されることのない、この段の現代における可能性をも示してい り定着していた典型を取込んであるとするもので、 演技であるが、 第三章は、『忠臣蔵』 第四章 『桂川道行』については、 先行論文との差別化や独自性の表出において不明瞭さなど 実は、 これ以前に「演技パターン」として視覚表現によ 十段目の義侠の台詞ばかりが強調される義平の 先行論文を遙かに凌ぐ結論に達しており、 扱いの的確さにおいて、 「伊勢物語」 の受容史に関する調 現代においては不人 圧倒的な説得力を

ろう。
した時点で忘れ去られてしまった「意味」を蘇らせた画期的な論考であした時点で忘れ去られてしまった「意味」を蘇らせた画期的な論考であ触れられたことのない「伊勢物語」との関係の指摘は、歌舞伎が古典化持っている。『桂川道行』という著名な作品において、どの解説書にも

あり、十分示唆に富む論となり得ている。 第五章は、他の章と同様にパターン利用をテーマにしたものであるが、 第五章は、他の章と同様にパターン利用をテーマにしたものであるが、 第五章は、他の章と同様にパターン利用をテーマにしたものであるが、 第五章は、他の章と同様にパターン利用をテーマにしたものであるが、 第五章は、他の章と同様にパターン利用をテーマにしたものであるが、

提示し、 関係が、たとえば「伊勢物語」 見であった。 文として十分な成果が認められるものというのが審査委員の一致した意 舞伎文化を再発見した点で、 曖昧なものとなり、 であれば必ず気付いていたであろういくつかの常識的な絵画と演技との に成功しており、その点で瞠目すべき成果がみられる。江戸時代の観客 歌舞伎の代表的な作品のいくつかに新たな解釈と作品論を提示すること の継承・変容の面を描き出し、近代が間に入ることによって断絶した歌 本論文には、今後に残された課題は存在するが、上記のような新概念を てしまい、どの解説書にもこの絵画文化が欠落してしまったのである。 全体として、 諸類型の存在について数多くの指摘をなし、またそうしたもの 演技パターンという独自のアイディアを注入することで、 明治以降は急速にこの共有されてきた文化が失われ 高く評価されるものと考えられる。博士論 のような見立てが、すでに幕末において、

試験または学力確認の結果の要旨

立命館大学)の学位を授与することを適当と認める。
ち、本審査委員会は、本学学位規程第十八条第一項により、博士(文学学会発表も国内において3回、海外において1回行っている。この点か近刊予定の単行本(審査あり・印刷中)に2本の論文収録が決っている。申請者は、すでに審査のある学術雑誌に2本の論文を発表しており、

友 田 義 行

『文学と映画の弁証法

——安部公房/勅使河原宏論—

学位の種類 博 士 (文学)

授与年月日 二〇〇八年三月三十一日

查委員

審

主査 中 川 成 美

副查 西 成 彦

副査 中 村 秀 之

論文内容の要旨

本学位請求論文「文学と映画の弁証法―安部公房/勅使河原宏論―」本学位請求論文「文学と映画の弁証法―安部公房/勅使河原宏の映画における協働を軸にして、一九五〇~は、安部公房と勅使河原宏の映画における協働を軸にして、一九五〇~ら、どのような共通点と差異を孕みながら、我々の想像力や身体に関与してどのような共通点と差異を孕みながら、我々の想像力や身体に関与してる。言語が映像や写真・絵画・音楽などの様々な感覚表現と往還しながる。言語が映像や写真・絵画・音楽などの様々な感覚表現と往還しながいくのかという視覚性と文学をめぐる問題項にアプローチを試みている。言語が映像や写真・絵画・音楽などの様々な感覚表現と往還しながいる。言語が映像や写真・絵画・音楽などの様々な感覚表現と往還しながいる。言語が映像や写真・絵画・音楽などの様々な感覚表現と往還しながいる。言語が映像や写真・絵画・音楽などの様々な感覚表現と往還しながいる。言語が映像や写真・絵画・音楽などの様々な感覚表現と往還しながいる。

がて映画制作の場で密接に協働する。安部の脚本による勅使河原の映画安部と勅使河原は、戦後すぐの前衛芸術運動で活動を共にした後、や

から— る。 いった言語芸術と映像芸術の双方の融合と乖離の問題について論じてい 合った一九五〇年代を詳述し、 映画資料について」、「結び」である。第一章で、安部と勅使河原が知り 法の小説化―『燃えつきた地図』論―」、補論「『安部公房全集』未収録 第五章「記録と幻想の原爆乙女―『他人の顔』論」、第六章「映画的 像論をめぐる論争―言語と映像の弁証法」、第三章「歴史と虚構の狭間 の下に、膨大な資料精査と解読、および分析、考察を重ねたものである。 しているとは言いがたい。本論文はその隘路を埋めていこうとする意思 リオについては全集未収録のものも多くあり、これも充分な研究が進行 分の評価と分析を得られておらず、また安部の側から言えば、彼のシナ 力を誘発するが、 密な意見交換を介在して完成した作品群は、いまも一種の圧倒的な喚起 とにした映画作品を自らがシナリオも担当し、なにより勅使河原との濃 のちに演劇活動に基盤を移していくようになるが、 化は、一 本論文の構成は第一章「協働の序幕―一九五〇~六〇年」、第二章「映 『おとし穴』論」、第四章「流動する風景と身体― 九六〇年代に発表された五本の劇映画に具体化された。 一方に映画史の領域からは勅使河原の全ての作品が充 やがて彼らが協働を通じて理論化して 安部の文学作品をも 『砂の女』論」、

いてが考察された。第四章は勅使河原、安部双方にとって世界的に躍進かった映画論争を採り上げ、安部と勅使河原の創作理論がどのような形で形成され、また振幅を増していったかについて追求している。そうした安部が原作・脚本を書き、勅使河原が演出した初めての協働作品である長篇劇映画[おとし穴]で示された様々な言語、視覚の実験的な試みる長篇劇映画[おとし穴]で示された様々な言語、視覚の実験的な試みを明らかにして、そこに介在した革新的な言語と映像、モンタージュ、第二章では一九六○年前後に展開された、言語と映像、モンタージュ、第二章では一九六○年前後に展開された、言語と映像、モンタージュ、

もつ直接性と、 キュメンタリー 運動のなかで提唱した創作理論とも重なるものであり、 力によって、不変的と思い込まれている言語を揺るがし、変革していく。 実を発見・再創造しようとした。その際に重視されるのが、映像的視覚 域に亙る問題として重要であることが指摘された。安部公房は、 う問題があったことがここで類推されている。この認識は文化研究の領 する想像的領域を芸術はどのように表現していくことが可能なのかとい 問題ではなく、いわば根源的に視覚と言語の間に横たわる、身体を介在 明されたことを中心に映画、小説双方の作品論がここで構成されている。 生じ、作品の構成や表現についても齟齬が生じていたことの論証である。 様な方法で分析を加えたが、ここで重要なのは徐々に両者の間に亀裂が ローチした。 覚的な認知の問題を解読していくための、 あるとの結論が導かれてい の方法こそが安部の考える言語と映像の弁証法であり、 な言語体系と、 意識の外から襲い掛かってくる偶発的なものの尊重は、 オタイプ化された言語で構成された現実を創作の力で解体し、 していくことによって、そこに見られる前衛的な視点と、身体に亙る感 していく役割をなした「砂の女」 しかし、これらは単純なコミュニケーションの齟齬などという私的 偶然性である。 草月会館に所蔵される勅使河原資料を精査することによって、 第五章「他人の顔」、第六章の それによって形成される現実を創造していくことー 言語のもつ間接性を意識し、両者の往還と衝突から新た 映画制作の中で培ってきた方法論とも共鳴する。 従来の言語 の小説、 (意識) では捉えられない映像の衝撃 映画双方の作品を等価に分析 新しい分析軸の創出にアプ 「燃えつきた地図」にも同 芸術の総合化で 安部が記録芸術 勅使河原がド 新たな現 映像の ステレ 解

し、安部・勅使河原は意識下に訴えかけるモンタージュという手法の多(従来の文芸映画が、物語に沿って映像を説明的に使用してきたのに対

立命館大学大学院文学研究科博士論文審査要旨

還的、 している。 その映像の中に刻印されている。 ば、 現状に異議を唱えて、 のあり方そのものが殆ど認知されない日本文学・映画、 術家の苦悩にも充分な筆を及ばせている。そして何より、 によって日本文学、 命名し、安部と勅使河原の夫々の創作理論と、二人のコラボレーショ の作品の中で、 メタファーとしての画面構成が、言語的な領域から逃れ得ないことをそ も表裏を成すという安部の主張が浮上してくる。 この点において、 の位相で展開される映像独自の体系を形作り、観客の視覚に作用する。 用によって、 言語化され得ない部分すら具体的な映像として創出していくための あるいはウロボロス的な困難の有様に「文学と映画の弁証法」と 勿論、ここで、 新しい想像領域を作り出している。 いわばメタフィクショナルな形で提出していることが 言語の変革は現実の変革であり、 日本映画は突出的な芸術表現を創出したことを力説 新しい視点と分析軸の提出を行っている。 不可能性ということに突き当たった二人の芸 本論文では、 こうした映像と言語の往 また勅使河原からすれ それは、 また視覚性の変革と また文化研究 こうした協働 ドラマとは別

であり、安部、勅使河原に関する双方の研究にとって重要なものである。掲載し、その書誌等については補論で展開している。非常に貴重な資料女(映画のための梗概)」と、「他人の顔(仮題)/愛の片側」を翻刻してなお、巻末資料として、『安部公房全集』未収録映画シナリオ「砂の

論文審査の結果の要旨

あった。 ・ 成彦(副査)、中村秀之(副査)の3名であり、陪聴者は14名でを)、西 成彦(副査)、中村秀之(副査)の3名であり、陪聴者は14名で末川記念会館第二会議室にて公開にて行われた。審査委員は中川成美(主 論文審査は二〇〇八年六月二十六日(木)午後3時から午後5時まで、

先ず申請者による請求論文の概略と要旨説明が行われた。要約は当を

一。員からの質疑と評価が申請者との間で交わされた。以下、その要点を記員からの質疑と評価が申請者との間で交わされた。以下、その要点を記得たものであり、明快で簡潔に論文の目的が説明された。続いて審査委

文から確認された。 範な理論摂取と先行研究捜索という基礎学習が寄与していることが、 された。それはやはり一次資料を丹念に調べ、また研究領域に関する広 中途半端な研究に陥っていないことは、各当該分野の審査委員から提出 研究方法のこれまでの成果である先行研究や当該分野の水準に達しない 能性が期待される。 学研究にフィードバックした研究は非常に少なく、その意味で今後の可 欠落を埋める画期的な研究として評価できるとの評価を得た。 審査委員から高く評価された。 発展してきたが、知覚力や想像力という身体的な経験を視野に入れて文 と言語芸術とは相違した表現形式としてこれまで別々の領域研究として から取り組み、豊富な一次資料の精査にもとづく分析を行なったことは て双方向的に考察するという、これまで省みられなかった主題に真っ向 安部公房と勅使河原宏の協働という観点から言語、 また、 領域を横断した研究にありがちな、 映画研究の側からも、 日本映画史研究の 映像の表現につい どちらの 視覚芸術 論

やはり考慮にいれれば、 完成した段階で、 であったという意見が付された。 としなかったからである。 弁証法」 台本がまだ揃わず、 、プシスの調査、 問題が指摘された。 その上での疑義であるが、映画研究では当然扱う「脚色 あるいは この問題の解決をしたいとの考えを示した。 検討の要があることを痛感しているが、 「言語と映像の弁証法」という問いの圏内から出よう またこれまで続けてきた関係者へのインタヴュ それは論文のストラテジーとして「文学と映画の 現場における脚色についても考察に加えるべき 映画が極めて実践的な表現形態であることを 申請者はこの問題について、 現在すべての (adaptation)

価を確認した。

一個を確認した。

一個を確認した。

一個できる。

試験または学力確認の結果の要旨

二〇〇六年度毎日映画コンクール 賞作である。 あるが、その中で「よみがえる不在―横浜の街と一人の女性」は かるべき評価を受けている。この他にも9本の活字化したエッセー等が 発表2本を含む口頭による学会発表9本、 査付き学会誌に4本の論文を発表、 申 請者は既に、 日本近代文学会、 「学生・ 掲載予定している。 昭和文学会など当該分野における審 翻訳3本があり、 映画見聞録大賞」年間大賞受 また、 学会でもし 国際学会

学にて研究を続行している。 二〇〇八年四月以降は本学ポストドクトラルフェローの採択を受け、本充分の能力を有している。中国語に置いても同様である。なお、語学力に関しては英語は本論文サマリー、また翻訳で示されたように、

内藤由直

国民文学のストラテジー

――プロレタリア文学運動批判の理路と隘路―

授与年月日 二〇〇八年三月三十一日学位の種類 博 士 (文学)

主査 中 川 成

美

審

查委員

副查 西川長 夫

副查木村一信

副査 花 崎 育

代

論文内容の要旨

本学位請求論文「国民文学のストラテジー―プロレタリア文学運動批本学位請求論文「国民文学のストラテジー―プロレタリア文学運動批本学位請求論文「国民文学のストラテジー―プロレタリア文学運動批本学位請求論文「国民文学のストラテジー―プロレタリア文学運動批本学位請求論文「国民文学のストラテジー―プロレタリア文学運動批

本論文の構成は、序章「国民文学とは何か」、第一章「戦時下の国民

立命館大学大学院文学研究科博士論文審查要旨

りの並木道」論―国民文学の本源的蓄積―」、 および付録 異と反復 三章「戦後国民文学論―言説編制の力学―」、 学作品への展開―」(附参考資料【『青年』書誌、 文学論-―政治の優位性論の転倒―」、 ―革命運動の理論と天皇制の問題―」、 「国民文学文献目録」である。 第二章 「林房雄 および本文異同詳細】)、第 第四章 第五章 結章 「佐多稲子「みど 「近代の超克へ」、 「戦中・戦後の差 『青年』 国民文

陥り、 再読、 らかにされている。 国民文学論・国民文学作品に織り込まれた近代主義批判・組織論批判の 明らかにしようと試みたが、特にこの章で「国民文学」という概念規定 性による現場の捨象)・組織的硬直化 に「国民文学」が、 請された議論であったことを明らかにしようとしたものであるが、 れらがプロレタリア文学運動批判の論理として理論的必然性を持って要 問題点を批判的に摂取し揚棄しようとしたものであったことを示し、そ 側面に注目し、 と、その実際的な生成の経緯についてが、描出されている。具体的には に看取される前代の反復を剔抉することで、 超克しようとする係争的議論であったことを指摘している。同時にそこ で、国民文学論が単なる国家主義的な言説ではなく同時代の文学状況を 関連作品を、 一章で、 先行する文学論に対する批判的言明としての側面に注目すること 過去の問題点を未解決のまま次代へと存続させていった様相 戦中の一九三七年に論争を引き起こした国民文学論および プロレタリア文学(民主主義文学)運動批判の言説として 「国民文学」が日本のプロレタリア文学運動に孕まれた プロレタリア文学運動の軛となった近代主義 (政治の優位性論)を反復する結果に 国民文学を枠付けた限界を (世界 同時 が明

て、彼が戦間期に発表した「青年」を素材に、「国民文学」の根底的なナショナリズム加担という振幅の大きい文学活動を続けた作家に注目し第二章では具体的に林房雄というプロレタリア文学から転向、そして

にしたがって「国民文学」の概念枠へと近づいていく経過が詳述されて考察した。プリレタリア文学に見られる創作上の方法論が、改稿を経るられているが、内藤氏はこれを精査してその改稿の意図と目的について概念の組成状況にアプローチした。この作品は数度に亙る書き直しが図

暴力的性格があることを指摘している。
第三章では戦後、一九五二年に論壇、文壇、学会など広範な人々によっな計画をでは戦後、一九五二年に論壇、文壇、学会など広範な人々によっ暴力的性格があることを指摘している。

範として機能してしまう側面を剥出した。合意という「民主主義」が一方に占領からの解放の中でより強い国民規という概念化と同時に行われる他者の排除・疎外の諸相を探り、国民的後民主主義運動と国家弾圧というテーマの中に、第三章で考察した国民第四章では佐多稲子の「みどりの並木道」という小品を採り上げ、戦

残された課題が次の論争を生起させた状況が示されている。 民文学論が、その理論的核心において、史的唯物論に基づいたブルジョ民文学論が、その理論的核心において、史的唯物論に基づいたブルジョ民文学論が、その理論的核心において、史的唯物論に基づいたブルジョ民立学論はプロレタリア文学運動がブルジョア革命を完遂できなかった問題を探りなる。ここに国民文学論が、その理論的核心において、史的唯物論に基づいたブルジョ民文学論が、その理論的核心において、史的唯物論に基づいたブルジョ

結章の「近代の超克へ」では戦中戦後の国民文学論に参加した文学者

録の これは今後の研究方向も指示していることはいうまでも無い。 は付録部分を除いて約四三○枚 治期二六編、 民文学に関する文献を蒐集・整理した目録で収録件数は、全五〇一件 どのような問題を残していったのかを、考察しようとする結びである。 代の超克〉 たちが、理論的な趨勢として必然として関わらざるを得なかった 国民文学文献目録」 論」を素材に、 戦中期一 四一編、 は明治期より現在へ至るまでに発表された国 国民文学論は日本近代文学の歴史におい 戦後三三四編) (四百字詰め換算) が収められている。 である。 なお、 明 付

五.

論文審査の結果の要旨

陪聴者は10名であった。

査)、西川長夫(副査)、木村一信(副査)、花崎育代(副査)の4名であり、末川記念会館第二会議室にて公開にて行われた。審査委員は中川成美(主論文審査は二○○八年七月十一日(金)午後5時から午後7時まで、

された。 明らかにしようとした国民国家と文化の関係にまでおよぶ文学研 動批判の論理、 が明確にされた。 にして当を得た口頭説明であり、 て認知されるものであろう。先ず、請求者の要旨説明があったが、 と問題点を析出し、 読み換えることによって、「国民文学」という言葉に内包される諸 に生起した国民文学論争とその同時代文学作品を、 本研究は、 日中戦争下の一九三七年、 特に「政治と文学」の関係性に対する係争的論理として その上で、 国民文学とは何であったのかという永続的な問 主査、 論文の主眼点、 副査による以下の質疑、 および戦後占領期 および論理構成の要点 プロレタリア文学運 の 一 評価が交わ 九五二年 簡潔

あった「国民文学」論争に着目したテーマ設定の大きさを、各審査委員これまで文学研究のみならず、文化研究の側面でも看過されがちで

るが、 ちな拡散的な印象は払底され、 ことが示された。巻末に付された「国民文学文献目録」がその一端であ らの参画などの描写が欠けることとなったが、口頭による質疑でその点 性格と、その論理の限界についてが、鮮やかに描出されることになった。 りからのアプローチもここで活かされて、国民文学論がもった両義的な との類縁性が浮上して、 とのことである。このことによって大きなテーマを扱った論文にありが 修士論文にて考察しており、この博士論文ではテーマをその点に絞った とによって、この論争の本質的な部分にアプローチしようとしたとの回 間期のプロレタリア文学との連関から抽出してそこに論議を凝縮するこ れたが、一般にナショナリズム論として提出されがちなこの論議を、 が高く評価した。その上で、このテーマの設定動機について質問がなさ に付いては厖大な量の基礎データを作成して、それらの精査も経ている 答を得た。 ただ、それがためにおそらくはそこに関与する右翼言説や農民文学か 今後それらを含みこんだ研究計画があることも言明された。 明治期、 大正期の「国民文学」との連続性に付いては、 論旨が明確となっている。国民国家論との関わ かなり明確な形でプロレタリア文学運動 既に

総合的にこの論文が高い水準にあることは各審査委員から評価され、総合的にこの論文が高い水準にあることは各審査委員から評価され、総合的にこの論文が高い水準にあることは各審査委員から評価され、総合的にこの論文が高い水準にあることは各審査委員から評価され、

本研究が今後、大きく成長していく可能性をもったものであるという評申請者の質疑応答は妥当であり、論旨も明確であった。審査者からは

の公刊を含めた発展を期待する旨が発言された。収斂させた背景をなす潜在的な実力についても充分に了解して、本研究な視線でのとらえなおしなどの批判でもあるのだが、戦略的にテーマを国民文学の世界的な現象についてのアプローチ、あるいは植民地主義的価をもって締めくくられた。それは本研究では充分の展開を見なかった

試験または学力確認の結果の要旨

中請者は既に、日本近代文学会、昭和文学会など当該分野における審査付き学会誌に5本の論文を発表している。また、その他に国際学会を査付き学会誌に5本の論文を発表している。また、その他に国際学会をまた翻訳で示されたように、充分の能力を有している。竹内好研究とのまた翻訳で示されたように、充分の能力を有している。竹内好研究とのいるものと判断する。なお、二〇〇八年四月以降は本学ポストドクトラいるものと判断する。なお、二〇〇八年四月以降は本学ポストドクトラいるものと判断する。なお、二〇〇八年四月以降は本学ポストドクトラいるものと判断する。なお、二〇〇八年四月以降は本学ポストドクトラいるものと判断する。なお、二〇〇八年四月以降は本学ポストドクトラいるものと判断する。なお、二〇〇八年四月以降は本学ポストドクトラルフェローの採択を受け、本学にて研究を続行している。

ることを適当と認める。位規程第十八条第一項により、博士(文学 立命館大学)の学位を授与す位規程第十八条第一項により、博士(文学 立命館大学)の学位を授与す審査委員は公開審査終了後、審査委員会を開いた。その結果、本学学

松枝

誠

『村上春樹研究―その暴力表象について』

学位の種類 博 士 (文学)

授与年月日 二〇〇八年三月三十一日

審查委員

主査 中川 成美

副査 木 村 一 信

副査 瀧 本 和 成

論文内容の要旨

復興を果たす。 学生運動が終焉した一九七〇年以降の都市が舞台とされ、 それに伴う都市化によって常に隠蔽され、 ている。 内においても、マイノリティーへの差別や排除という形で表立って現れ を内在化したものであったことは、論を挨たない。それは戦後の日本国 鮮戦争やアジアへの経済進出を背景とした、 放棄することで終戦を迎えた日本は、以後、平和憲法の名のもとに経済 的な意味の開示にある。 樹作品に埋め込まれた暴力と、そこから派生する暴力表象の諸相と隠喩 で享楽的な生活を送る人物が主人公となる。そこでは、 本学位請求論文 しかし、そうした暴力は、 しかし、 「村上春樹研究―その暴力表象について」 戦後のそうした平和や復興とされるものが、 ポツダム宣言を受諾し、アジア各国の植民地を 一九六〇年代以降の高度経済成長、 、消去されている。 戦争を継続する形式の暴力 現在自らが加担 消費社会の中 は、 村上作品も、 村上 朝 春

> 前に現れる。 村上がどのようにそれらを作品の中に構築していったかを考察する。 る暴力を顕在化させ、現在も行使されている暴力に対する責任について、 いう分析軸を立て、そうした記憶を検証することで隠蔽され、消去され を隠蔽するのではなく、現在に定着させ、 憶を略取することで戦前の暴力を反復させようとする人物が、主人公の 記憶も、高度資本主義によって抹消されつつある。そして、そうした記 がらも戦後には忘却された「羊」として探求される。 のとして想起され、 ることを暴露するのが、アジアをめぐる暴力の記憶の噴出である。 している暴力は隠蔽されている。 高度経済成長期に行なわれた故郷の埋め立てに際して排除されたも 村上作品は、こうした記憶の噴出が描かれることで、 あるいは、戦前のアジアへの大陸進出に利用されな しかし作中で、 継承することを図っていると そうした場が幻想であ しかし、こうした それ

本論文の全体構成は、序章、第一章「埋め立てられた海岸の記憶―村本論文の全体構成は、序章、第一章「埋め立てられた海岸の記憶―村本論文の全体構成は、序章、第一章「埋め立てられた海岸の記憶―村本論文の全体構成は、序章、第一章「埋め立てられた海岸の記憶―村本論文の全体構成は、序章、第一章「埋め立てられた海岸の記憶―村本論文の全体構成は、序章、第一章「埋め立てられた海岸の記憶―村本論文の全体構成は、序章、第一章「埋め立てられた海岸の記憶―村本論文の全体構成は、序章、第一章「埋め立てられた海岸の記憶―村本論文の全体構成は、序章、第一章「埋め立てられた海岸の記憶―村本論文の全体構成は、序章、第一章「埋め立てられた海岸の記憶―村本論文の全体構成は、序章、第一章「埋め立てられた海岸の記憶―村本論文の全体構成は、序章、第一章「埋め立てられた海岸の記憶―村本論文の全体構成は、序章、第一章「埋め立てられた海岸の記憶―村本論文の全体構成は、中華、

とは、 判するべきであると述べたことを指摘した。そこで素朴な「ノスタルジ 市幻想」を批判すると同時に、「アジアの影」である「農耕幻想」 す「アジアの影」と換言可能とし、村上は「アメリカの影」としての と崩壊についての考察を展開している。村上が述べる「都市」と を聴け』、『1973年のピンボール』、『5月の海岸線』 第 によって、「過去」を美化し、 一章で、 加藤典洋が分析するところの「アメリカの影」、 村上の故郷である阪神間を舞台にした作品である 回帰することに批判的な村上が浮上 またその影をな を対象に、 風 「故郷」 の歌

とを申請者は考察している。するる。こうした村上の視点は基本的な彼の作品に注がれる視点であるこする。

意識化されない隠蔽された暴力の埋め込みがここでもなされているのでされた羊も、「意志」としての「羊」も、日本という国家を成立、継続させるための存在であった。『羊をめぐる冒険』は、それが戦前から現させるための存在であった。『羊をめぐる冒険』は、それが戦前から現させるための存在であった。『羊をめぐる冒険』は、それが戦前から現るでは『羊をめぐる冒険』を対象に、村上が初めて描いた北海道ある。

冒険』 をめぐる冒険』では見ることのできた失われた場所に対するノスタルジ 前作で訪れた十二滝村は登場しない。さらに札幌も都市再開発が行なわ の作品は、 アさえ喪失されている。 る、企業が主体となる都市再開発を想起させるものである。そこでは『羊 れ、「いるかホテル」は強引な地上げによって消滅している。これは、 意識されている。 ここで展開されている。 一九八三年というほぼ同時代であり、一九八○年代という時代は明確に 九八二年に成立した中曽根内閣によって提言された「規制緩和」によ 第三章で対象とする作品は、 の三部作に連なる、「僕」を語り手とした作品であるが、 『風の歌を聴け』、『1973年のピンボール』、『羊をめぐる 舞台は『羊をめぐる冒険』に引き続き北海道であるが 奪うことの暴力と都市の関与についての論旨が 『ダンス・ダンス・ダンス』 である。 時代が

る。彼は政治家という立場を利用し、テレビというマス・メディアを用想起させる人物は、主人公「僕」の妻の兄に当たる「綿谷ノボル」であ検討を加えている。『ねじまき鳥クロニクル』において、戦中の記憶をでも取り上げられていた満州移民といった日中戦争の記憶を主題にして第四章では、『ねじまき鳥クロニクル』を採り上げ、『羊をめぐる冒険』

同様に、 する人物となっている。 章は、 は、 いて、 している。 明確なアイデンティティーの確立」を図るというものであり、 は、こうした を批判し、それに対峙する「僕」を襲うことになる。 して描かれている点である。 「大衆」がノボルのアジテーションを受け入れ、暴力を行使する人々と 伯父から教わった、 満州国についても言及がなされ、綿谷ノボルは、『羊をめぐる冒険』 アジテーションを行なっている。その内容は「日本という国 戦中から現在まで継続される「日本」という意志の継続を体現 〈他者〉の排除という暴力を行使することを分析の主眼と しかし、『羊をめぐる冒険』と明確に異なるのは 石原莞爾が源流となっている。 ノボルを無批判に受容する大衆は、 綿谷ノボルー ノボルの書く文 その思想 ノボル

戦争は、 間宮らが満州からハルハ河を超えてモンゴル 行 国人や蒙古人を軸に、 たのだといえる。こうした歴史の事実と、 境が画定され、 行しているのであるが、 く異なるものである。 地」としかみなさない。これは無論、 原に対する認識に見て取ることができる。間宮はそこを「価値のない土 は 面 注目できるのは、 出 来事を中心にノモンハン戦争という歴史について考察している。まず 第五章では同作での間宮徳太郎によって語られる「ノモンハン」での っている。 のみが描かれている。そこで注意せねばならないのは、 「他者」が存在していない点である。それは、 描かれていない点である。 それが契機となり、 戦時のノモンハンを描きながらも、そこにノモンハン 間宮は「戦闘用の専門的な地図」 村上の意図と暴力の関係についての検討を詳 間宮のこうした帝国的なまなざしによって、 後のノモンハン戦争が引き起こされ 作中ではノモンハン戦争の直前に、 当時のモンゴル側 想像領域での (外蒙古) 彼らのホロンバイル草 作成のために同 へと越境する場 不在の他者、 の認識とは、 彼らの越境に 細 玉

立命館大学大学院文学研究科博士論文審査要旨

な村上論を提出した。 暴力表象とその出自を探査して圧倒的な叙述力によって、新しくも重厚申請者は一貫してこれまで語られることのなかった村上春樹における

論文審査の結果の要旨

る。 と評価が交わされた。以下にその概容をまとめ、審査結果の要旨とす ち着いた明確な論旨と目的がここで示された。続いて審査委員からの質 先ず、申請者による請求論文の要旨、主旨説明が口頭で行われた。落

となるであろう。 あるものになっている。 関係論文が必要であるが、 デビュー作から持続的に主張されてきた暴力と他者排斥、 だものである。それはやはり視点として定めた「暴力」の問題であり 非常に優れた叙述力によって大部な本論文を一気に読ませる魅力に富ん アーレントに関する村上作品への援用は、 査委員は全員、 企図してきたことが、 と国家欲望の関係など、 た暴力表象を精査して、 本請求論文はこれまでの村上春樹研究には殆ど欠けていた埋め込まれ この点を高く評価した。こうした論理の構築には多くの 請求論文の緻密な論理構成から浮上してきた。 多岐にわたる問題設定をかなり意識的に村上が 特に依拠したヴァルター・ベンヤミン、 その意味、 海外文献を含んだ広範な読解によって厚みの 意図、 理論と作品が結び合った事例 目的を探ろうとするもので、 あるいは暴力 ハンナ・

その上での欠けているところとして国家権力と個人の関係へのアプ

広い研究の領野に進んでいくことが期待される。てしまうかを考えていきたいとの回答を得た。今後の課題として、より力主体としての国家をどのように個人(大衆)は意識の下に隠蔽していっローチが画一的ではないかという疑義が出された。これには申請者は権

五六

員は高い評価を与えた。後ある影響力をもってくることも予感されて、優れた論文として審査委後ある影響力をもってくることも予感されて、優れた論文として審査委く、ごく自然に作品分析をする過程から抽出された申請者の分析は、今無理に一つの概念の中に作品を押し込めていくような論理飛躍がな

試験または学力確認の結果の要旨

分に備わっているものと判断する。有している。中国語の読解能力も同様である。外国語に関する能力は充語学力に関して英語は本論文サマリーで示されたように、充分の能力を語学力に関して英語は本論文サマリーで示されたように、充分の能力を発表、あるいは発表予定している。また、その他に国際学会を含む口頭やに備わっているものと判断する。

ることを適当と認める。位規程第十八条第一項により、博士(文学 立命館大学)の学位を授与す位規程第十八条第一項により、博士(文学 立命館大学)の学位を授与す審査委員は公開審査終了後、審査委員会を開いた。その結果、本学学

湯浅彩央

れを繋げて比較し、

今日的な模様への史的変化を考察したものである。

『近代日本語における当為表現』

学位の種類 博 士 (文学)

授与年月日 二〇〇八年三月三十一日

· 查 委 員

主査 彦 坂 佳 宣

副査 中 西 健 治

副査 赤 間 亮

論文内容の要旨

究であり、以下のような7章構成である。相当を前部、「ならない」相当を末尾とする)に関する歴史的・地理的な研想出論文は、「当為表現」(「ねばならない」などの類―必要な場合、「ねば」

表現の変化、第6章―当為表現の全国分布とその解釈。第4章―尾張地方における当為表現、第5章―国語教科書における当為らの一考察、第3章―近世以降の東西方言における当為表現の史的研究、為表現の変遷、第2章―関東地方における当為表現―史的変化・分布かはじめに―研究の視点と方法、第1章―江戸語における打消表現と当

八〇七地点調査、6巻最終巻の完成は二〇〇七年)所収の関連地図などにこ『方言文法全国地図』(以下GAJ、国立国語研究所編、昭和五〇年代、全国様を考察し、文献資料での史的考察をする。さらに今日的な模様を示す戸語」「上方語」「尾張方言」という地理的広がりを視野に入れ、その模戸語、「上方語」「尾張方言」という地理的広がりを視野に入れ、その模戸語、「上方語」「尾張方言」という地理的広がりを視野に入れ、その模戸語、「上方語」「尾張方言」という地理的広がりを視野に入れ、その模

明治から昭和一 こには~ネバナランからニャナラン/~ナーナランへの変化があるこ 尾張戯作資料により、 ネバナルマイ類から次第に~ナクテハナラナイ/イケナイへの変化があ での各地方言史の模様と比較しながら考察している。 証している。第4章は上方と江戸の中間に位置する近世期尾張の模様を とし、これを近世以降の各種文献からもほぼ同じことが言えることを論 イカンからアカンへの変化、東日本ではナラナイからイケナイへの変化 世以降の当為表現から比較する。今日の地図の分布からは、西日本では ことを論証する。 から~ナクテハへの変化、末尾はナラナイからイケナイへの変化がある しながらも、 る今日の関東地方の模様と比較し、言語分布の解釈に迷う点があるとは の各種資料を加え、これを大橋勝男 て、この変化を確認している。 料と噺本資料とを対比させ、両者ともほぼ似た変化のあることを押さえ は、上方と江戸との地域比較の視点を交え、やや性格を異にする戯作資 に今日に近い~イケナイ形も末期に現れることを論証する。方法として わるとされるが当為表現の場合はその変化を先取りしていること、僅か 変化が見られること、これは江戸での打ち消し表現がヌからナイへと変 ヌなど否定ヌからネバナラナイ・ネエケリャナラネへなど否定ナイへの 戸語について、 これを今日のGAJへと繋げる史的研究を目指すとする。第1章では江 **はじめに」では、** 性格は江戸語よりも隣接する上方語に似ることを述べる。 文献の模様も勘案し、およそ当為表現の前部は~ナケレバ 一○年代までの国語・国定教科書での当為表現史を、 関連の深い否定表現との比較から、 第3章では、古来ある関東と関西の二大対立方言を近 江戸・上方・尾張の3地域に亘る研究視点を持ち、 隣接する禁止表現も顧慮しながら探っている。こ 第2章はこれをうけ、 『関東言語地図』 上方的な~ネバナラ およびGAJによ 初期の文語的な〜 近代 (明治以降 第5章は

模様についても論じて、 詳細は省くが、 らない」を対象とし、 証している。第6章は主としてGAJの第二○六図「~行かなければな や遅れて現れること、 るとし、 江戸語・東京語の変化と軌を一にするものの、 東西方言の模様が第3章に準じることの他に、 それは教科書としての規範性に起因することを論 全国的な当為表現の変化の模様を推測している。 全国的な変化を鳥瞰する試みとしている。 変化の模様は 他 地域 0 Þ

論文審査の結果の要旨

にわたり、日本文学専攻共同研究室において3名の審査委員で行なった。 委員全員の一致した見解は以下のとおりである。 本論文の審査は二〇〇八年七月十二日 (土)、午後1時半から約2時間

国語教科書を対象にした考察は、 えられ、 られる。この配慮により、 比的に考察し、 ⑤これら文献による研究とGAJなど今日の模様を示す言語地図類を対 国語教科書、また地域的に珍しい尾張の資料を含んで行っていること 来の戯作資料に加え、落語資料、 主要地域にわたる広い視野から行っていること、 用意周到であること、 のにもなっている。 ①対象が今まで研究の手薄であった分野に切り込んだものであるこ 本論の特徴および評価される点は次のようである。 ②研究視点として否定・条件表現など関連表現を見合わせて行い、 結果として東西地域の表現史の違いなどが明確になっている。 資料・地域・歴史的考察に厚みを加えていることがあげ ③近代語研究を近世期以降の江戸・上方・尾張の 結論はおおむね妥当なものとなっていると考 標準語形成史の一端を明らかにするも 洋学資料 (外国人の日本語研究資料)、 ④研究資料として、 従

上の各項を敷延する。

①について、 当為表現の研究はあるものの歴史面に及ぶものが

> 少なく、 あり、 こと、 関連も視野にいれ、 組んでいる。 異なる層の資料群を組み合わせ、重層的なデータに依って考察している ④の点も、 の文献による考察結果と比較・対照させる方法は、 献資料とは異質な資料である。そうした言語地図を解釈し、 地理学的に解釈したものであり、資料と研究方法を異にするものに取り が文献資料によるものであるのに対し、今日的な模様を示す言語地 であり、得られた結論に多彩さを加える結果となっている。 が言語的・地理的な面で上方語に通う点を指摘したことも特筆される。 まで注意の及びがたかった中間地域の尾張についての研究も行い、 究はあるが、新しくそれを対照する視点で考察していること、さらに今 徴である。③の点については、今まで上方語、 否定表現の変化はこれに先立つこと、またこれと条件表現の諸形式との ナイ系に変化したことは周知のことであるが、論文では当為表現内での 論文の特徴と認められる。 また限られた研究者が使用していた尾張方言の資料も含めた考察 厚みのある結論を導く結果となっている。 かつ②のような関連表現を見合わせた研究視点を持つことが本 従来、 この方面は方言学の分野で多少の研究もあるが、 単一類の資料をもとにした研究が主であったものを、 その中での当為表現の位置を考察していることが特 江戸語における否定表現が上方的なヌ系から 江戸語についての個別研 新しくかつ意欲的で ⑤は、 それを従来 従来の文 以上 尾張 図

語 ある。その一部がここに実現している感がある。 の確立を探る点に及んでいることも本論の特色である かつて江戸語研究者の前田勇氏が語法の全国的研究を提 国語教科書による標準 唱したことが

とは言え、 瑕疵もある。

各章ごとに結論は述べられているが、それをまとめる章が欠落している する明確な記述があまり見あたらず、やや首尾の一致に欠ける点がある。 まず、 序論において研究の視点と方法が述べられるが、 本論中で対応

認められ、従来の研究に新見を加えており、博士論文に値する成果がある。特に地域的・位相的な差異を含む資料において、この点への配慮は必須であろう。言語地図の読み取りは、東西方言の中心部は良く出来ているが、周辺地方への視野を強め、各地への伝播模様を含んだ考察を加えることが望ましい。多少の字句・表現に修正すべき箇所もある。しかし、全体としては、研究の入り口にたった者の真摯な精進の成果と認められ、従来の研究に新見を加えており、博士論文に値する成果がと認められ、従来の研究に新見を加えており、博士論文に値する成果がある。特に地域的・位相的な差異を含む資料において、この点への配しかし、全体としては、研究の入り口にたった者の真摯な精進の成果がある。特に地域的・位相的な差異を含む資料においた。

試験または学力確認の結果の要旨

りはあるものの、全体に良く考えられたものであった。国的な学会での口頭発表もある。審査における質疑応答も、多少のつま申請者は、既に学術雑誌に3つの論を発表し(内2つは審査あり)、全

と認めるものである。 条第一項により、博士(文学 立命館大学)の学位を授与することを適当条第一項により、博士(文学 立命館大学)の学位を授与することを適当

橋 本 万里子

"True Personal Relationships in E. M. Forster's Novels: Forster's Attitude toward Individualism and Diversity"

学位の種類 博 士 (文学)

授与年月日 二〇〇八年三月三十一日

審查委員

主査 川 口 能 久

副査 丸 山 美知代

副査中原章雄

論文内容の要旨

人主義と多様性尊重の姿勢に留意しつつ考察したものである。フォースターの5編の長編小説における真の人間関係の探求を、彼の個本論文は、20世紀イギリスの代表的な小説家の一人であるE・M・

用文献目録から構成されている。論文内容の要旨は以下の通りである。論文は英語で書かれ、序論、4章から成る本論、結論、注、補遺、引

Introduction

立する可能性について論じる。悪でもあるもの」という考えに着目し、人間の衝突や真の人間関係を確思でもあるもの」という考えに着目し、人間の衝突や真の人間関係を確したがって議論する。その際、特に対照的な2つの土地と「善でもあり本論文は彼の生前に出版された5編の小説をおもに出版された順序に

1. Influence of Italy

Where Angels Fear Tread と A Room with a View は、出版の順序に イギリス中産階級の、因習的な価値観から脱却しようとする姿がえがか イタリアとイギリスとが対置され、イタリアの影響をうけたヒロインが イタリアとイギリスとが対置され、イタリアの影響をうけたヒロインが インハる。

2. The significance of places and conflicting formation

(1) Monteriano vs. Sawston

り、中世にたとえられている。 ある。一方、イギリスを代表するソーストンは因習的、偽善的な町であ 然な感情を重視するという点で理想的にえがかれている。Where Angels 然な感情を重視するという点で理想的にえがかれている。Where Angels がかれている。Where Angels がかれている。Where Angels

しかしている。
スターは、場所を変えても、自分を変えない限り、救済されないことをスターは、場所を変えても、自分を変えない限り、救済されないことをて自由になるはずであったが、その目論見は失敗に終わっている。フォーヘリトン夫人との関係を考察している。リリアはジーノとの結婚によっここではおもにリリアとジーノの結婚、彼女とソーストンを代表する

(2) Those Who Forget Views and Those Who Remember Them

長しようとする者(ルーシー)とその成長を阻もうとする者(バートレット、いるが、この小説では人物間の対立に重点がおかれている。精神的に成A Room with a View においてもイタリアとイギリスとが対置されて

は「眺めを忘れる人」と言える。セシル)とが対立している。前者は「眺めを覚えている人」であり後者

六〇

2. The development of the Heroines

(1) Caroline Abbott – Travel for Self-Emancipation

結婚は失敗に終わる。アの自己解放を託したからでもある。しかしリリアのアの自己解放に自らの自己解放を託したからでもある。しかしリリアのことによってリリアは自己を解放すると考えたからであり、また、リリキャロラインはリリアがジーノと結婚することに賛成する。そうする

果よりも成長の過程に重点を置いているのである。しかし彼女は確実に内面的成長を遂げたのであり、この小説は成長の結ソーストンに戻る。彼女の自己解放への旅は失敗に終わったとも言える。最終的にキャロラインはジーノへの愛情を成就させることもなく、

(2) Lucy Honeychurch – Escape from the Middle Ages

"view" "light" によって示唆されている。彼女の精神状態は "room" "darkness" や彼女はそのようなセシルとの婚約を解消し、エマソン氏の忠告にしたセシルは中世的な人物であり、ルーシーを芸術作品と見なしている。

自分自身の感情を表明し、自分自身に誠実に生きることを選ぶ。認識する。彼女たちは、不十分ではあるが、そのような価値観を拒否し、ちがイギリス中産階級に特有の因習的な価値観にとらわれていることをキャロラインとルーシーはイタリアで新しい価値観と出会い、自分た

Chapter 2 The Longest Journey: Dilemmas of Rickie Elliot

1. Challenge to the Conventions

自伝的な作品であり、作者自身この作品にはもっとも強い愛着を抱いてThe Longest Journey はもっとも評判のよくない作品だが、もっとも

マをえがいているからである。マや、例えば同性愛をタブーとするモラルへの挑戦やその際のディレンいる。それは作者自身が抱えていた理想の世界と現実の世界のディレン

2. Three Significant Places

の人生やリアリティの喪失と密接な関係をもつ。のパートのタイトルでもある。これらの場所は象徴的な意味をもち、彼ケンブリッジ、ソーストン、ウィルトシャはこの小説を構成する3つ

3. Rickie's Weakness

彼の生い立ちにあることを具体的に論証している。れは彼の結婚にも大きな影響をあたえることになる。彼の欠点の原因がリッキーの欠点は、一言で言えば、他人を理想化することであり、そ

4. Rickie's Deterioration

ストン的価値観に支配され、リアリティを失い、苦悩するソーストンでアグネスとの結婚生活を送ることになる。そこで彼はソードの抱擁を目撃したこととジェラルドの突然の死である。リッキーはリッキーとアグネスの結婚のおもな要因は、彼がアグネスとジェラル

5. A Portrait of an Artist

のリッキーのディレンマは作者自身のディレンマと関連している。ンブルック氏からは世俗的成功を求められる。このような芸術家としてけの自信をもてないでいる。実際彼の小説は出版社からは拒否され、ぺここではリッキーにとっての小説を書くことの意義が論じられてい

6. Brotherhood (To Wiltshire)

アグネスとの結婚に終止符をうつが、スティーヴンを理想化したためにて、同性愛関係を超えた、真の人間関係をえがこうとした。リッキーは作者はリッキー、アンセル、スティーヴンの関係をえがくことによっ

スの将来というテーマは Howards End の中心的テーマとなる。スティーヴンをイギリスの継承者としている点は注目に値する。イギリ最終的に自らの命を失う。作者がウィルトシャの自然、大地を象徴する

Chapter 3 Howards End: Forster's View of His Love for England

1. Concern of England's Fate

値観と新しい価値観の共存の可能性を模索している。 階級を構成する3家族の衝突と結びつきをえがくことによって、古い価象徴されている。フォースターはこの屋敷をめぐって展開される、中産運命に関する小説である。それはハワーズ・エンドと言う屋敷によっての観します。

2. Condition of England

(1) From "Wiltshire" to Howards End

Howards End の中心的なテーマとなっている。は、すでに The Longest Journey に表 明されているが、それが自然破壊に代表されるイギリスの現状に対するフォースターの懸念

(2) London

でもある。 of luggage"の象徴であり、この文明が中産階級の想像力の欠如の原因外に拡大している。ロンドンは"nomadic civilization""the civilization ロンドンは、絶えず変化し、流れるイメージで描かれ、その勢力を郊

(3) Howards End

エンドや田園は残存物であり、生き残る保証はないが、それでも作者はンドとそれに覆いかぶさる楡の木によって象徴されている。ハワーズ・象徴である。理想的な人間関係である comradeship は、ハワーズ・エーハワーズ・エンドはイギリスが何世代にもわたって築いてきた伝統の

2. The Spiritual Heir

ドの精神的後継者を必要としている。ス夫人にとってハワーズ・エンドは精神であり、彼女はハワーズ・エン彼らにとってハワーズ・エンドは「もの」でしかないが、ウィルコックットルコックス表人は他のウィルコックス家のメンバーとは異なる。

夫人の精神をも引き継ぐことを意味している。ガレットがハワーズ・エンドを引き継ぐことは、彼女がウィルコックスいもの」に価値を置くことを見抜き、彼女を精神的後継者に選んだ。マーウィルコックス夫人はマーガレットが人間関係といった「目に見えな

3. Challenge to a New Age

る。
コックス家への反発を強め、精神的な「内的生活」を重視するようになに惹かれるが、ポールとの関係が破綻したのをきっかけに逆にウィルへレンはウィルコックス家の男性的な「電報と怒り」の「外的生活」

とになる。子供はイギリスの将来に対する希望でもある。て、彼と性的関係を結び、二人の子供がハワーズ・エンドを継承するこの問題と深く関係している。ヘレンは、ウィルコックス家への反発もあっ新しい時代の代表である。彼はまたその時代の犠牲者でもあって、お金中産階級の最下層に位置し、事務員として働くレナード・バストは、

4. Connection

合うことを意味している。フォースターは相違や多様性を積極的に認め合し、一つにするのではなく、それぞれの長所を受け入れ、短所を補いネクションの一つの具体例である。コネクションとは異なる価値観を融コネクションをテーマにしている。マーガレットとヘンリーの結婚はコこの小説は、"Only connect"というエピグラフからも明らかなように、

ようとしているのである。

六二

Chapter 4 A Passage to India: The Collision of Human Beings

1. "Mosque," "Caves" and "Temple"

A Passage to India は "Mosque" "Caves" "Temple" の3部より構成されている。 "Mosque" "Caves" "Temple" は小説の舞台であると同時にイれている。 "Mosque" "Caves" "Temple" は小説の舞台であると同時にイれている。この小説の基本的なテーマは

2. Echo: The Collision with Oneself

対峙させる機能を果たしている。りわけマラバー洞窟のエコーはムア夫人とアデラに自己の抱える問題との体験と関係しており、第2部「洞窟」はこの小説の転換点である。とアジズ、ムア夫人、アデラのそれぞれが抱える問題はマラバー洞窟で

3. "Sky": Beyond Human Limitation

人がいつか友人になれることが空によって暗示されている。とし、人間の限界がしめされる。この結末は一見悲観的ではあるが、二まざまな障害を越えて一度は友情を結ぶが、最終的に二人の間に亀裂がまざまな障害を越えて一度は友情を結ぶが、最終的に二人の間に亀裂がまざまな障害を越えて一度は友情を結ぶが、最終的に二人の間に亀裂がまざまな障害を越えて一度は友情を結ぶが、最終的に二人の間に亀裂がしがいつか友人になれることが空によって暗示されている。

Conclusion

物とそれに対立する場所や人物との衝突をえがき、イギリス中産階級にフォースターの小説は、イギリス中産階級的因習を象徴する場所や人

属する人物を批判する。

新しい人生に挑む主人公がえがかれている。 a View, The Longest Journey では異なる価値観の対立に重点がおかれ、初期の3作品、すなわち Where Angels Fear to Tread, A Room with

なる価値観や社会の調和が探究されている。 後期の2作品、すなわち Howards End, A Passage to India では、異

から真の人間関係を結ぶことの困難さをえがいているのである。フォースターは個人や多様性を重視する作家であり、そのような立場

論文審査の結果の要旨

総合所見を以下に述べる。15分ほど説明し、その後質疑応答がなされた。審査員3名の合議による時間、学而館第一研究会室で行われた。はじめに申請者が論文の要旨を申請論文の公開審査は、二〇〇八年七月十三日午後1時30分より約2

本論文にまとめた努力と力量は高く評価できる。 本論文はE・M・フォースターの5編の長編小説の基本的主題である 本論文はE・M・フォースターの小説をほぼ出版順に取り上げ、人間関係の限界と真る。フォースターの小説をほぼ出版順に取り上げ、人間関係の限界と真の要旨でしめしたように、申請者は章を節等に下位区分し、明確な論点を定め、論理的な破綻をきたすことなく、全体で一八八ページという長を定め、論理的な破綻をきたすことなく、全体で一八八ページという長の要請論文にまとめた努力と力量は高く評価できる。

し、イタリアはイギリス中産階級の愚かさと偽善を際立たせていると的Tread と A Room with a View はどちらもイギリスとイタリアを対比もとづくものであり、説得力がある。例えば、Where Angels Fear to 各章の論考は、主要な先行研究を踏まえた、テキストの緻密な読みに

用している点も評価される。 用している点も評価される。 まのインドを見たいというヒロインの願望は他の在印イギリス人とは異当のインドを見たいというヒロインの願望は他の在印イギリス人とは異なろうとする彼女の挑戦であることを指摘している。論を展開するにあなろうとする彼女の挑戦であることを指摘している。と、第4章では本は2人のシャペロンの役割が逆であること、第3章ではフォースターが確に指摘している。また、斬新な指摘も散見される。例えば、第1章で

本論文の特長の一つは、各々の小説を個々にではなく、相互に関連付本論文の特長の一つは、各々の小説を個々にではなく、相互に関連付の書式も適切である。

も指摘された。 で書くべきことを作品や文献からの引用で済ましている箇所があること しい時代への挑戦」が充分に議論されていない。また、 キーとフォースターの関係が充分に論じられておらず、 結婚したのか充分に考察していない。第2章では芸術家としてのリッ リアとジーノの結婚を議論しているが、そもそもなぜリリアがジーノと に議論がやや表層的であることをも意味している。 もある。論点を定め、 しかし、 公開審査で指摘されたように、本論文にはいくつかの問題· 明快に論じたことはさきに触れたが、 例えば、第1章でリ 本来自分の言葉 第3章では それは同時 点

念規定が不十分であること、あるいは喜劇的な人間描写や小説の技巧へ内容を説明しただけの箇所があること、Individualism という言葉の概上記に加えて、第2章の"Rickie's Deterioration" のように、作品の

立命館大学大学院文学研究科博士論文審查要旨

審査において、申請者は質問に対して的確に応答した。の配慮があれば更にすぐれた論文になっていたことが指摘された。公開

分に評価できる。 論文であることは審査員の一致した所見であり、課程博士論文として充フォースター研究に打ち込んできた粘り強い、誠実な申請者ならではの請論文の基本的な価値を損なうものではない。長い時間をかけて地道に 以上のように申請論文には不十分な点が見られるものの、それらは申

試験または学力確認の結果の要旨

の学位を授与することを適当と認める。 博士 (文学 立命館大学) がじて、本学学位規程第十八条第一項により、博士 (文学 立命館大学) いで試問の全部を免除した。当審査委員会は学位申請者が博士学位に相応しいで試問の全部を免除した。当審査委員会は学位申請者が博士学位に相応し 論文の骨子をなす複数の論文を学術雑誌に公表し、学会において口頭発 申請者は立命館大学大学院文学研究科博士課程後期課程に在学中に本

川 由希子

六四

早

"Searching for the Self in Sylvia Plath's Poetry"

学位の種類 博士(文学)

授与年月日 二〇〇八年三月三十一日

查委員

主査 Robert MacLean

副査 丸 山 美知代

監査 高 島 清

論文内容の要旨

The thesis is a depth study of Sylvia Plath's search for an authentic self within her poetry. It is conducted from three perspectives: an explication of poems seminal to her oeuvre, in particular from the posthumously published *Ariel* (1965); a comprehensive reading of Plath's journals, letters and autobiographical novel, *The Bell Jar* (1963); and analysis from the vast field of secondary critical literature which has proliferated around Plath's cult status as an icon of the feminist movement.

Chapter 1, "The Reincarnation of a Father Figure," considers five major poems which explore the complex daughter-father nexus. Plath undergoes a series of descents to confront her father, who died when she was eight years old ("I would breathe water"). He is visually imaged as a drowned sea-god and colossus, with their Greek and

Roman mythological prototypes, and as Nazi, with Holocaust imagery. It is demonstrated how the poems move chronologically from obsession with the father as internalized absence to a metaphorical severing in order to free herself from joining him in death, i.e., suicide.

In chapter 2, "The Daughter's Ambivalence toward her Mother" stresses the discrepancy between Plath's effusive letters home and her increasingly vehement poetry and journal entries expressing bitter hatred of the mother's middle-class American values and perceived devaluations. Giorgio de Chirico's painting "The Disquieting Muses" (1917) is examined in conjunction with Plath's poems are traced to mythological origins: the moon, mouth, stone, gorgon and Medusa.

Chapter 3, "Anxiety as a Mother," focuses on a lesser known aspect of Plath, eight poems dealing with maternity, in the categories of pregnancy, miscarriage and child-rearing. Plath's extraordinary foetus poems are examined in detail. Special attention is given to the two contradistinctive final poems she wrote six days before her suicide at the age of 30 on 5 Feb 1963 in a flat in London, deserted by her husband: "Balloons" and "Edge."

Chapter 4, "The Confrontation with the Self," looks at nine poems not directly related to Plath's obsession with the family, showing how the theme of death and rebirth recurs in variations of vivid complexity and incantatory power. Here, the predominant images are tulips. the mirror, lake, queen bee and phoenix.

The "Conclusion" emphasizes how throughout all the preceding texts, the family consists of invented characters, incongruent with a strictly biographical template. In this sense, it is wrong to subsume Plath as a "confessional" poet. Rather, she creates a dramatis personae based on her real family, in order to plumb the presence of a third invisible presence, a sense of authentic self as realized within an artistic artifact, the body of the poem. The touchstone to authenticity is discovered to dwell within the language itself.

感情を巧みに制御している。白詩人に分類されている。彼女は自身の詩において仮面を被り、自己の白詩人に分類されている。彼女は自身の詩において仮面を被り、自己の葛藤や憎悪を題材として詩を書いたシルヴィア・プラスは、告

語り手は、彼女自身と家族の関係を通して自己を内省する。 本論文では、プラスの詩における語り手が自己を探求する過程を辿る。

に母から独立できない。

「メデューサ」の語り手は、母との関係を断ち切ろうとするが、精神的で、父を比喩的に殺すことによって父との関係を断ち切ろうとする。おいて、父を比喩的に殺すことによって父との関係を断ち切ろうとする。おいて、父を比喩的に殺すことによって父との関係を断ち切ろうとする。月やメデューサのイメージと結びつけ、冷淡さや残忍性を強調している。月やメデューサーの語り手は、母に対して愛憎を抱いている。彼女は「お父さん」には、父を「五尋もの深みに」では海洋神ネプチューン、「巨像」では巨は、父を「五尋もの深みに」では海洋神ネプチューン、「巨像」では巨は、父との関係を主題にしたプラスの初期の詩において語り手である娘父との関係を主題にしたプラスの初期の詩において語り手である娘

方で、「ニックと燭台」では、詩人の息子がキリストのように奇跡的などもを自身から切り離そうとし、独立した存在であると考える。その一「朝の歌において、語り手である母は子育てに不安を感じており、子

わることを望む。
ザロ夫人」では、語り手である女性が新しい人間になるために生まれ変向き合い、「針」と「冬越し」では、女王蜂に自身をなぞらえている。「ラ本当の自分を探すために、「鏡」における語り手は鏡を用いて自己と

や経験を芸術作品に昇華したのである。したのだと考えられる。彼女は詩に独特なイメージを用い、自身の感情直すことによって、彼女自身の人生における役割や個性を認識しようとプラスは詩の語り手に自身を投影し、家族との関係から自己を見つめ

論文審査の結果の要旨

Ms Hayakawa's oral examination was held on 13 July 2008, from 10:00 am to 12:00 am, in Gakuji-kan, Room 1. Two people attended it. To the examiners' questions Ms Hayakawa answered quite clearly and accurately.

The strong points of this thesis lie in its multilayered approach to Plath's lifelong obsession with the nuclear family.

Most important, and fundamental to the entire thesis, is the precise explication of individual poems in their entirety. Plath's verse consists almost entirely of imagery. often obscure and surreal. The thrust of the thesis emphasizes that it is crucial to follow the internal logic of images based primarily on visual origins, which overlap into aural, tactile, gustatory and olfactory connotations. This shifting internal structure of 'webbing' is traced in poem after poem through a close reading.

Secondly, the wider scope of Plath's prose writing is regarded as a

vital exegesis upon the crystallized poems. In particular, the thesis draws upon *The Bell Jar, Letters Home: Correspondence 1950-63, Johnny Panic and the Bible of Dreams and Other Prose Writing* (1977), and the unexpurgated journals of 1950-62, along with BBC interviews which prove insightful toward understanding the poems.

六六

Thirdly, the extensive field of Plath criticism has been thoroughly researched and used judiciuosly in the explication of the poems.

Throughout, the distinction between an 'I-narrator' and a autobiographical speaker in the poetry is insightful, avoiding the reductive method of biographical analysis.

The examiners agree that the thesis is exemplary in the originality of its theme, the scope of its research and the quality of its written English. The final thesis could have been improved with less repetition of the same key points, and more incisive exploration of Plath's imagery.

試験または学力確認の結果の要旨

審査請求者は、立命館大学大学院文学研究科博士課程後期課程在学中審査請求者は、立命館大学大学院文学研究科博士課程入学時の外国語の成績が良好であったこと、本英語論文らず、博士課程入学時の外国語の成績が良好であったこと、本英語論文らず、博士課程入学時の外国語の成績が良好であったこと、本英語論文も清が研究者として必要な複数の外国語に堪能であることなどから、申請者が研究者として必要な複数の外国語に堪能であることは明らかである。

評価を総合的に判断して、本学学位規程第十八条第一項により、申請者上記の諸点、および「論文審査の結果の要旨」に示した審査委員会の

に博士(文学)立命館大学)の学位を授与することを適当と認める。

諸 点 淑

『東アジア植民地における日本宗教の「近代」

―植民地朝鮮における日本仏教の社会事業を事例として―』

授与年月日 二〇〇八年三月三十一日

学位の種類

士 (文学)

審查委員

主査 桂 島 宣

弘

副查川嶋將生

副查神田秀雄

論文内容の要旨

第一章では、従来の日本近代仏教史研究、とりわけ植民地朝鮮との関「近代性」を基軸に植民地支配のありようを再検討したものである。日本の仏教、とくに真宗大谷派、浄土宗教団が、植民地朝鮮において具体のにいかなる「社会事業」を行ったのかを追跡し、従来は民族主義史観座から再検討したものである。本論文で初めて紹介された「社会事業」を多く、植民地支配の新しい社会史研究としての意義も有している。日本多く、植民地支配の新しい社会史研究としての意義も有している。日本の人後半まで、日本仏教が行った「社会事業」を詳細に分析しつつ、その代後半まで、日本仏教が行った「社会事業」を詳細に分析しつつ、その代後半まで、日本仏教が行った「社会事業」を詳細に分析しつつ、その代後半まで、日本仏教が行った「社会事業」を詳細に分析しつつ、その代後半まで、日本仏教が行った「社会事業」を詳細に分析しつつ、その代後半まで、日本仏教が行った「社会事業」を詳細に分析しつつ、その代後半まで、日本仏教が行った「社会事業」を詳細に分析しつつ、その代後半まで、日本仏教が行った「社会事業」を書から、とりわけ植民地朝鮮との関係。

あった日韓の民族主義史観が隠蔽してきた問題を摘出、さらに社会学なするそれらの限界を指摘するとともに、歴史的には不可避的なものでわりでの日韓のほぼ全ての研究を詳細に検討し、特定宗派に偏って分析

存在していることも示されている。
の研究動向についても検討を加え、それらの批判的摂取の上に本研究がかりが、その近代主義的評価の問題性を指摘して、本論文の課題設定とを行い、その近代主義的評価の問題性を指摘して、本論文の課題設定とどにおける日本仏教の社会事業の組織化・社会化の研究についても検討

においては「植民地主義」という「近代性」を深く内在したものとして ている。 抵抗の範疇」 産であったこと、 出された、それ自体が明治初年期以来の日本仏教自体の「近代性」の所 展開されるが、これは仏教的教化と社会教化の不可分の関係によって創 真宗による「向上会館」を中心とする社会事業は、 過程を再検討する有効な素材であることが示されている。 て論じられている。一八七七年朝鮮布教と同時に実施した教育事業は、 け、その 意識的強要=「参加」 は真宗大谷派や朝鮮のヘゲモニー的な同時性において推進された近代化 日本人を対象にしたものであったとはいえ、そこで整備された教育基盤 近代的主体」として形成される 第二章では、 「空間」が身体的規律化の〈場〉として存在し、 に入るものであったことなど、注目すべき論点も提示され 植民地前後の朝鮮における真宗大谷派の社会事業につ また植民地朝鮮におけるその受容も近代化過程 過程としてあったことが論じられている。 〈場〉 であったこと、 植民地という 抵抗も「日常的 植民地時代の 朝鮮人自体が とり こへの無 ⟨場⟩ わ

仏教を包摂しようとする帝国的近代の性質を孕むものであることが示さう側面での受容であったこと、だが浄土宗側においてはその実践は朝鮮る。ここでは、朝鮮人=朝鮮仏教にとっては、その受容は「文明」といもに、朝鮮人を対象とする教育事業が行われたことを詳細に検討してい第三章では、浄土宗の社会事業を取り上げ、一八九八年朝鮮布教とと

刻んだ存在でもあったというのが、ここでの結論である。 る。 れている。真宗の「向上会館」による社会事業と同じく、その構造には を打ち出しつつ人びとを秩序化せざるをえないその特性が刻印されてい すべからく「植民地性」を内包した「近代」 され、それが「慈善という支配」を実施したものであったことが論証さ も結びついた れている。 近代宗教化を遂げた日本仏教とは、その特性をもっとも深く自らに 浄土宗の 「慈善」、 「和光教園」を中心する社会事業からは、 明治期日本で体験された「慈善」の性質 の欲望、「普遍性」「 総督 社会性 が 府と

六八

の意味での 論 他者によっ 代性」こそ、 を帯びたものであったというのが、本論文の結論である。このような「近 宗教としての 権力関係に無自覚に活動を行う立場がみられ、 植民地期の 代性」を構造的に鼎立させたことから惹起されるものであったとされる 本仏教の「近代性」とは、上記の日本仏教の様々な局面で表出する「近 日本仏教の「近代性」とする。 これらを総合して論者は、 トでなされるという「帝国主義」「植民地主義」的宗教としての「近代性 宗教としての「近代性」。第三は、このような事業が朝鮮総督府のサ 第二は、 られている。第一は、近代的「文明」を体現した宗教としての「近代性」。 業」が照らし出す日本仏教の「近代性」について以下のように結論づけ 一づける。 最後に、 個人に還元されない社会的慈善事業を行う「普遍的」 真宗大谷派、浄土宗を素材に、 て、 「文明」を伝達する日本仏教の活動からは、 「植民地的近代」は随所に存在している。 われわれが未だにその内部に存在している近代であり、 「近代性」 それは初めて明るみに出されるものなのだ、 は、 その それ自体が「帝国」「植民地主義」 すなわち、 「近代性」を 植民地朝鮮における 「植民地的近代」としての日 「植民地的近代」としての その「普遍的」 植民地朝鮮という ヘゲモニー的な と論者は結 「社会的 「社会的 的 社会事 性向 ポー

論文審査の結果の要旨

2. 主査・副査の試問を総合した内容は以下の通りである。時にかけて、末川記念会館第二会議室で行われた。傍聴人5名。1. 本論文に対する公開試問は、二〇〇八年七月二十日午後1時から3

される。 通暁する必要があり、 るものと評価できる。 級の歴史史料を詳細に精査し、 な日本語で執筆されたもので、 ングル・日本語、 本論文は、 留学生であり日本語を母語としないにもかかわらず、 植民地期のハングル・明治~大正期の日本語に十分に かかる論文が可能となるためには、 本論文からは申請者のそうした力量が十分に理解 学界で十全に活躍できる優れた水準にあ 最新の研究成果を縦横に用いつつ、 漢文史料、 的 第

この の議論 代宗教化」した日本仏教が、 今も続く近代自体に接続する問題群が問われ始めたといえよう。 放後のいわゆるポストコロニアルの問題をも捉えることが可能となり、 同時性の過程として日韓関係を捉え、さらには世界史的な過程として、 分に理解しつつも、近代自体が孕む問題を問えないその陥穽を克服すべ 対立を基軸に近代化を歪曲してきたものとして植民地支配を捉える従前 民地近代性」論が存在している。すなわち、親日派・反日派などの二項 うとしたものと位置づけられる。そして、明治期を通じて、 ルに着目しつつ、この「植民地近代性」論の議論を批判的に発展させよ 本論文の土台には、昨今の日韓人文社会科学に重大な影響を与えた「 植民地支配自体が近代化の所産として存在し、そのヘゲモニー的な 時期を位置づけんとする議論である。この議論の登場によって、 (民族主義史観とよばれる)に対して、その議論の歴史的経緯は十 (仏教)」「社会事業 それ故に必然的に (慈善)」というかなり難度が高いジャン 「社会化」「普遍化 急速に「近 本論文 を

> という斬新な局面が切り開かれたことは、高く評価される。 代化に伴う諸軋轢)、さらには植民地支配を「身体の規律化」で捉えるたのというのが、本論文の主張である。この視角によって、確かにいわた朝鮮民衆の動向なくして、その植民地支配は到底「実現」されなかったのというのが、本論文の主張である。この視角によって、確かにいわゆる「民族主義的な抵抗」だけでは捉えきれない「日常的抵抗の範疇」(近ゆる「民族主義的な抵抗」だけでは捉えきれない「日常的抵抗の範疇」(近れる)、まさに「近代宗教」としての遂げ(それが「近代宗教化」の内実である)、まさに「近代宗教」としての遂げ(それが「近代宗教化」の内実である)、まさに「近代宗教」としての

るものといえる。 解明された事実が散見される。これらも本論文の歴史学的な価値を高め がである。また、「土幕民」対策をとくに焦点化した部分にも、新たに どである。また、「土幕民」対策をとくに焦点化した部分にも、新たに がである。また、「土幕民」対策をとくに焦点化した部分にも、新たに がである。また、「土幕民」対策をとくに焦点化した部分にも、新たに がである。また、「土幕民」対策をとくに焦点化した部分にも、新たに がである。また、「土幕民」対策をとくに焦点化した部分にも、新たに とである。また、「土幕民」対策をとくに焦点化した部分にも、新たに といえる。

とえば、 れた粗暴な特性が、 どう考えるのか。それらも近代化過程といえるとしても、 らの人びとこそがむしろ植民地支配や仏教の 代的と評される農村部から大量の人びとが朝鮮半島に押し出され、 全体が有している特性、また同じ理由から急激に社会分化が起こり前近 析するが、たかだか数十年で急速に近代宗教化を遂げた日本仏教の活動 いう壮大な視座にたつことで、逆に見えにくくなった問題群である。 の精進で是非克服していってほしい点でもある。第一には、「近代_ 民地近代性」論の議論自体が内包している問題でもあり、 だが、本論文には幾つかの不十分な点が認められる。それは、 申請者は、 本論文では後景に退けられているのではないか、 日本仏教の活動全体を「近代」「文明」 「布教」 に携わった事実を そこに刻印さ 今後の申請者 の視座で分 また「植 それ لح

拠しているのではないか。 軋轢などは、 リズムの特性、 ショナリズムの生成とその軋轢は、 来のいわゆる民族主義史観が後景に退けられた分、 きではなかったか。 心・救済・ 0) 日本仏教の近代化体験の一翼としての植民地での活動という視座は、 というタームだけでは分析しえるものではないのではないか。第二には 論文でも、「向上会館」「和光教園」などでの騒動が詳細に紹介されつつ のなのか、史料的制約は理解できるとしても、もう少し深く抉り出すべ かく、「内面化」「救済」に関わる分野を取り扱ったのであるならば、 かに斬新な視座といえる。だが、なぜ「宗教」なのか、なぜ「仏教」 おいては不可欠なものであったと考えられるが、それは「近代」「文明 いう疑問を禁じえない。 「宗教」に関わる問題群である。「宗教」における近代化体験、 か、 それが十分に意味づけられていないのは、そのような不十分性に依 般的ナショナリズム論では拾いきれない日韓関係独自のナショナ 本論文ではその点がやはり明確になっているとはいえない。 難儀・奇跡・布教などに関わる植民地体験とはどのようなも 植民地期朝鮮の分析には不可欠なものであるといえる。 前近代以来蓄積され下敷きのように内在化された反発、 第三に、 また、 ナショナリズムに関わる問題群である。 仏教の汎アジア的な特性も、 中心的な主題とはなってい 本論文では日韓のナ その活動に とりわけ せっ 従 本 だ 信 確

だろう。本論文の日韓での公刊時までには是非克服してもらいたい。きな研究課題の一つの重要なステップとして、本論文は位置づけられるに着手していることを考えるならば、東アジア近代史・宗教史という大ば、必ずしも困難な課題とは思われない。申請者自体、すでに次の研究以上の問題点は、本論文を提出した申請者の研究力量を加味するなら

とりわけ以下の点が、本論文が博士論文にふさわしい優れた内容を有し以上の問題点があるにも拘わらず、結論的には、本審査委員会では、

史料、 る。 いる。 高 上から、本論文は学術的に高い水準にあるもので、 開いたと評価できること。 や、さらには植民地支配を「身体の規律化」で捉える斬新な局面を切り 抵抗」だけでは捉えきれない「日常的抵抗の範疇 ているとの結論に達した。 い評価を獲得できると判断される。 歴史学的には、こうした点も重要な学界への寄与と考えられる。 韓国側史料については、全て申請者が克明な日本語訳を付して また十九世紀~二十世紀の韓国側の史料の紹介が随所で行わ 第二に、本論文では、 第一 に、 本論文は、 V 真宗・浄土宗関連の新 わゆる「 (近代化に伴う諸軋轢) 公刊時には学界から 民族主義的 以

試験または学力確認の結果の要旨

分に判断される。 英語に対しても申請者は高い実力を有していることは、本論文からも十究者としての地位を確立している。また、韓国語・日本語はもとより、部は学術雑誌に公刊されており、既に申請者は、日韓の学界で気鋭の研独創性・体系性と高い学術的価値をもつとの結論に至った。本論文の一上記の審査委員の見解に基づいて合議した結果、この論文は、十分な

適当と認める。 十八条第一項により、博士(文学 立命館大学)の学位を授与することを十八条第一項により、博士(文学 立命館大学)の学位を授与することを当審査委員会は、以上の点から総合的に判断して、本学学位規程第

櫻 澤 誠

| 地域政治構造の変容過程||戦後沖縄における復帰運動と

学位の種類 博士(文学)

授与年月日 二〇〇八年三月三十一日

審查委員

主査 桂 島 宣 弘

副査 小 関 素 明

副查 長 志珠絵

論文内容の要旨

搾取に対する評価の違いにあったことが述べられ 実主義的な未来像を提起したこと、そして、決定的な差異は戦前日本の 戦後初期の沖縄における復帰論と独立論の再検討がなされ、 沖縄社会への影響が明らかにされ、 う二項対立が存在することが指摘された上で、二項対立が生じる過程 先行研究のなかに自明のものとして「復帰/独立」「保守/革新」とい てそれらがどのように変容したのかを検討したものである。序章では 復帰運動と地域政治構造のありようを明らかにし、 を提起したのに対して、 転換」を再検討することの必要性が論じられている。 [、]帰属論争の思想的内実が検討されている。 復帰論は基地のない未来像 本論文は、一九六七 - 六八年に生じた「復帰運動の質的転換」以前の 独立論は基地による収入・援助を基盤とした現 従来肯定的に評価されてきた「質的 てい 「質的転換」によっ 次いで第一章では る。 第二章では 講和交渉期

> には、 て、 いる。 らかにされている。 試みられている 的 よる支配構造の固定化に寄与していることが論じられている。また、「質 立の問題が地域政治構造の変容に注目しながら考察され、 世論に喚起することに成功したこと、勝利したはずの教員と地域との間 保守側は戦後沖縄社会で自明だった教員による政治行為に対する疑念を 止闘争の勝利によって「質的転換」が生じた後であること、その過程 義の再考が試みられている。 会と教員との関係の変容過程が検討され、教公二法阻止闘争の歴史的意 ことが論じられている。 組織を立ち上げ保守側と対決するというダブルスタンダードが成立した 復帰協は超党派の運動団体としての姿勢を保持し、 立 興と主要労組の結成は、青年会を中心として行われたことが重点的に明 ながら重要な役割を担ったこと、また、一九五○年代後半の復帰運 を展開し、 た教員達は、 形成を軸に検討がなされている。 転換 九六一年那覇市長選の共闘成立が重要な画期となったこと、その際に 九五〇年代沖縄の地域における教員の役割について、 していた野党三党が保守側との対立軸を明確にしていく上で、 一九六○年代初頭の革新共闘への過程を中心にした検討がなされて 以降、 沖縄県祖国復帰協議会結成時(一九六〇年)において、 以前の運動の経験が忘却されていることの現代的意味の考察が 特に、 沖縄教職員会の結成後、 溝が生じ始めたことが指摘されている。 両組織に属していた青年教員は、 第三章では、沖縄における保革対立軸の形成につい 第四章では、一九六○年代沖縄における地域社 ダブルスタンダードが解消されたのは、 講和交渉期に組織的活動ができなか 沖縄青年連合会とともに復帰運動 選挙に際してのみ別 地域と密接に関 終章では、 社会運動 日米両政府に 互いに対 二項対 の基準 わり 阻

論文審査の結果の要旨

き点、問題点として以下の点が確認された。問を踏まえて、審査委員3名によって審議した結果、本論文の評価すべ本論文の口頭試問は七月十八日に行われ、傍聴者は4名であった。試

はともかく、その学問的覇気と気宇壮大な研究姿勢は評価に値する。組みとは別の枠組みを構成しようと果敢に挑んだことである。その成否において最も大きな影響力を保持し続けている新崎盛暉の作り上げた枠において最も大きな影響力を保持し続けている新崎盛暉の作り上げた枠まず評価すべき点は以下の点である。第一に、未だ若手研究者とも言まず評価すべき点は以下の点である。第一に、未だ若手研究者とも言

研究に一石を投じる論点を提示したものと評価できよう。その様相に着目した上でその意味を考察したことは、今後の復帰運動史を復帰運動に大きなヘゲモニー転換をもたらした一大転機と位置づけ、段階的変化を捉えることを試みたことである。特に「教公二法阻止闘争」第二に、これまで必ずしも明確には意識されてこなかった復帰運動の

時の運動関係者への度重なる「聞き取り」調査の成果を縦横に活用して 所蔵琉球政府文書)をはじめとする原史料を本格的に活用し、 を運び、これまでの研究では本格的に活用されてこなかった「復帰協文 究の遡上に上げたことである。 がら、これまでの研究では必ずしも真正面からは取り上げられてこな と参画していった動きに分析の手を加え、その意味を考察したことは本 若手教員たちが地域社会や父兄と緊密な関係を構築しながら復帰運動 た若手教員の地域社会における活動状況を初めて本格的に復帰運動史研 かった教職員組合の動勢、その構成員の変容、とりわけその主力を成し や運動関係者の個人文書、 復帰運動を推進するなかで中核的役割を果たしたと目され 琉球政府の 通算すれば三〇回あまりも現地沖縄に足 「内偵文書」(沖縄県公文書館 さらには当 な

論文の独創性として特大筆してよい。

七二

に描き、 内外の政党に系列化され、 びた復帰運動が、 治的バイアスから自由であろうとする筆者の姿勢の反映と言えよう。 ていることである。これは、 第四に、 復帰運動を歴史的経緯の中で再構成しようとする試みがなされ この教職員会の動向を中心に、 さまざまな確執を孕みながらも、 政治運動へと純化していく流れと様相を詳細 成否はともかく、 「島ぐるみ闘争」 運動史研究に付着した政 労働運動団体や沖縄 0) 相 記貌を帯

方法論、論点にしぼって以下に記したい。問題点に関しては、本論文の評価に大きくかかわる、事実評価、視座、

要局面 することである。 者の概括的回顧 者 ② 一九五八年の立法院選挙、 なり存在するため、 として高く評価すべきであるが、他方で運動の重要部分や転換点を関係 かった復帰運動の空白部分を埋めようとしたことは本論文の独創的試 踏み込んだ検証や分析がなされていないこと。③当時運動を担った関係 にはそれと機を一にした地域社会と教員との関係のあり方の変容など重 を契機とした政界再編、「教公二法阻止闘争時のヘゲモニー転換」、 まう」とされているものが何か殆ど述べられておらず、不明であること。 ていながら、 さが残されているということである。①「島ぐるみ闘争」 第一に、以下の諸点において事実検証の甘さ・不明さ、 への聞き取り調査を精力的に行い、これまでに明らかにされ (変化)に関して、概括的な様相が俯瞰されているだけであり、 復帰運動のヘゲモニー転換によって「大きく捨象されてし (証言) 運動の具体像が不明確なまま残されている面が存在 のみを頼りに再現・考察しようとした部分がか 一九五〇年代後半時点の沖縄諸政党の結成 分析の一 が当初内包し 一个十分 てこな さら

をめぐっても以下の問題点が残されているということである。①復帰運第二に、復帰運動の諸特質、運動にまつわる諸事象の評価・位置づけ

明確であることである。 ②さらに復帰運動がそもそもなぜ「革新」 題なのかという根本的な点に関する説明が十分になされていないこと、 がそれに代わるどのような運動史の捉え方をしているのかがいま一つ不 れなくも無いことである。 両者を等式で結ぶことが可能であるとするかのような安易な傾向が見ら 拠を構成するものではないにもかかわらず、筆者の所論の基調において、 動全体の中での復帰論の位置が相対的なものに過ぎないということの論 物に過ぎない」という指摘はその通りであるにせよ、それは必ずしも運 たかということに関して、 その責めを負わせることが妥当か否か検討の余地が残されていること またそうした傾向の研究を先導した研究者として新崎盛暉を取り上げ、 目であるにもかかわらず、 図が踏襲されていることの問題性を指摘するというのが本論文の一大眼 されたことに付随して運動を捉える研究者の認識枠組みにもその対立 ていないこと。③新崎批判を意識した筆者の「復帰論は歴史的経緯の産 いうことが指摘されているだけで、入念な検証と説得的な説明がなされ ?の対立構図が次第に保守・革新という二項対立的構図に強制的に再 保守派が運動にそうしたレッテルを貼ったと なぜに二項対立構図で運動を捉えることが問 ④最後に、 新崎批判の当否は別にして、 陣営の運動という性格を強め 筆者

摘が審査委員からなされた。 その他一部の文章表現、論文の構成について再考の余地があるとの指

ていないこと。特に現時点で米軍基地問題にゆれる沖縄の現状を目の当とは望みがたいこと。第二に、復帰という選択の評価自体が未だ定まっと、そのためにそれら関係者が相互に配慮・牽制しあった情報の提供をの点である。第一に、運動を担った関係者の多くが未だ生存しているこの点である。第一に、運動を担った関係者の多くが未だ生存しているこの点である。第一に、運動を担った関係者の多くが未だ生存しているこの点である。第一に、運動を担った関係者の多くが未だ生存しているこの点である。第一に、運動を担った関係者の多くが未だ生存していることになっている。

してその評価を定めることはできないという難題を抱えている。たりにするとき、その感を深くする。さらに日米関係のあり方を度外視

ない。 での研究を継続してきた。 れを衝き動かし、 備が存在するとしても、 る「違和感」 に運動を担った当事者が一九六○年代の運動のあり方に対して抱いて 大きな意識の懸隔が存在することに衝撃をうけた筆者は、一九五〇年代 する過程で、当時運動を担った当事者の間に、 発することは酷に失すると言えよう。現地沖縄での調査を精力的に推進 これらの点を勘案したとき、本論文が積み残した問題点を一方的 の根拠と由来を探求することを自らの課題に課し、 今に続く沖縄問題の根の深さを再認識させずにはおか 本論文の随所に横溢したその問題意識はわれわ 本論文の完成度と説得力にかかわる若干の不 世代間ギャップも含めた 今日ま に摘

として評価するに値するものと言えよう。(その点をふくめ、今後の確かな可能性を予感させる本論文は博士論文

試験または学力確認の結果の要旨

独創性 断される。 対しても申請者は高い実力を有していることは、 しての地位を確立している。 部は学術雑誌に公刊されており、 上記 ・体系性と高い学術的価値をもつとの結論に至った。本論文の一 の審査委員の見解に基づいて合議した結果、 また、 既に申請者は、 英語はもとより、 本論文からも十分に判 学界で気鋭の研究者と この論文は、 中 国語 (古文) に 十分な

適当と認める。 十八条第一項により、博士(文学 立命館大学)の学位を授与することを 当審査委員会は、以上の点から総合的に判断して、本学学位規程第

立命館大学大学院文学研究科博士論文審査要旨

磯部直希

一民藝」のインクナブラー『井ルヤム・ブレイク書誌』

学位の種類 博 士 (文学)

授与年月日 二〇〇八年三月三十一日

垂査 委員

主査 竹 山 博 英

副査 上 田 高 弘

副查鶴岡真弓

論文内容の要旨

を含む、4章からなる論文である。藝』への道、その装丁にみる形式と意匠」は「はじめに」と「むすび」藝』への道、その装丁にみる形式と意匠」は「はじめに」と「むすび」本論文「「民藝」のインクナブラー『井ルヤム・ブレイク書誌』から『工

ての柳宗悦の思想と活動という側面を明らかにしようとしている。関係を論じることで、民芸運動の知られざる部分、すなわち出版人としお今まであまり注目されてこなかった分野、つまり書物・出版と民芸のは今まであまり注目されてこなかった分野、つまり書物・出版と民芸のは今まであまり注目されてこなかった分野を網羅していたが、本論文芸運動は絵画、染織、陶磁器など幅広い分野を網羅していたが、本論文芸運動の主唱者であった柳宗悦は関東大震災で被災し、一九二四年民芸運動の主唱者であった柳宗悦は関東大震災で被災し、一九二四年

11

第1章では柳の京都移住のいきさつ、寿岳文章との出会いが書かれて

柳と寿岳を結びつけたのはブレイクに関する研究であり、

さらに

た意欲的な出版企画が進められることになった。そこにヨーロッパ滞在は書物を「総合芸術」ととらえる考え方だった。そこにヨーロッパ滞在な話物を「総合芸術」ととらえる考え方だった。そこにヨーロッパ滞在た意欲的な出版企画が進められることになった。

いた。 行された。 社主の中林安右衛門は大阪で製本技術を学び、古書の修復で腕を磨いて なされることになった。その時に活躍したのが大阪の中林製本所である。 震災により東京の出版社は大打撃を受け、関西の出版社に大量の発注 たちの手により、 らしたとされている。このパターソンから製本技術を学んだ日本人職人 省印刷局で働いていた御雇い外国人パターソンが洋式製本の技術をもた \mathbb{H} 九二九年に七二四ページに及ぶ大著『井ルヤム・ブレイク書誌』が刊 本の印刷術は大蔵省で紙幣が印刷されることで発達したが、その大蔵 第2章では洋式製本がいかに日本にもたらされたか、 伊藤は中林安右衛門に装丁を依頼し、 日本における出版が少しずつ発展していった。 2年以上の歳月をかけ、 が論じられる。 関東大

柳 れ、 版活動にも生かそうと考えていた。 柳が手がけたものだった。柳はこれを「晝母」「組繪」と呼び、 葉状の装飾が配されていたが、それは西洋の本の伝統を意識しており、 和紙の伝統を生かした洋紙であった。表紙や背表紙には、箔押しにより 本に使われた用紙は、 つけるのに多大な努力を払い、結局邦楽器に用いられる皮革を使用した。 第3章では『井ルヤム・ブレイク書誌』の装丁、デザイン等が検証さ 、論じられる。この本は当時としては異例の皮革装丁がなされていた。 寿岳、 伊藤は、 日本ではなじみのない、 「局紙」と呼ばれていた、 柳は書物を「総合芸術」ととらえ 本の装丁に用いる皮革を見 大蔵省印刷局の用紙で、

的工藝」にしようとしたが、完全に満足のいくものにはならなかった。考えた。柳は『井ルヤム・ブレイク書誌』を「稚拙美」を持つ、「民衆の美」であるとして、個々の装飾要素を、全体を構成する一要素としてそれをゴシック美と称した。「ゴシック美とは個人を越えた秩序と法則

作り」に幅広く携わり、民芸の中にしかるべき位置を与えようとした。 日本において「和紙」がいかなる状況で生産されていたか考察される。 日本各地の紙の産地を調査し、「工藝」の用紙にも日本紙を用いた。そ 日本各地の紙の産地を調査し、「工藝」の用紙にも日本紙を用いた。そ 日本各地の紙の産地を調査し、「工藝」の用紙にも日本紙を用いた。そ 日本各地の紙の産地を調査し、「工藝」の用紙にも日本紙を用いた。そ はて「和紙」がいかなる状況で生産されていたか考察される。 であった。ここでは日本画に用 はした。出版人としての柳宗悦は装丁から用紙まで、書物という「もの であった。ここでは日本画に用 はした。出版人としての柳宗悦は装丁から用紙まで、書物という「もの であった。ここでは日本画に用 はした。出版人としての柳宗悦は装丁から用紙まで、書物という「もの はした。という言葉を広めるのに貢

その分析は明快であり、 思想であった。その実践が になぞらえ、様々な部分が有機的に組み合わさるゴシック建築のような 生む」のが ものだと考えていた。 具体的に分析することで論述を進めている。その結果として書物を「総 からの分析とは違っていて、 から論じている。 る」べきであり、「製本の様式や綴じ方を生かすことで、 合芸術」ととらえる柳宗悦の立場が明らかになる。柳は書物を「建築 本論文は出版人としての柳宗悦に焦点を当て、民芸運動を新たな視点 用紙、 「工藝」 装飾にいたるまで、 「総合芸術」としての書物である、という考えが柳の根本的 の編集、 それは今まで多くみられた美術史的、 書物の美しさは「製本工程の必然的な発展に求め 刊行であったのだが、論者はその実践を製本、 論述も論理的かつ緻密で、 『井ルヤム・ブレイク書誌』 書物を構成する素材とそれを用いる技法を 詳細に、 具体的に分析し、論じている。 分な説得力を持っ 思想史的な観点 の発刊であり、 内部から美を

ている。

析にも及ぶ。本論文のすぐれている点は、 価できる。 を越え、 析を行った点にある。 印刷業などの分野を対象に、歴史的、社会史的観点から非常に詳細な分 刊行を通じて考察しただけでなく、 の動向分析に通じ、さらにはある素材、 出版に関する柳の実践活動の分析は、 明治、 大正期の産業史、社会史、文化史的分析としても高く評 特に和紙の成立に関する部分は、 明治、 ある技法の歴史、 柳を取り巻く様々な人物 柳と民芸運動の関係を書物の 大正期の製紙業、 民芸運動の分析 社会状況の分 0)

論文審査の結果の要旨

本論文は、これまで民芸運動の黎明期にさほど大きな意味を持ったと本論文は、これまで民芸運動のを見ての「書物」を、独自の綿密な調査をは考えられてこなかった工芸としての「書物」を、独自の綿密な調査を本論文は、これまで民芸運動の変明期にさほど大きな意味を持ったと本論文は、これまで民芸運動の黎明期にさほど大きな意味を持ったと本論文は、これまで民芸運動の黎明期にさほど大きな意味を持ったと

に及んでいて、 製本、装丁、 ている。 る分野は素材を、 にあった日本の出版界の様々な分野が、 本論文は、具体的調査とその分析が、 特に本論文の第3章は、 用紙、 しかも記述が詳細なところに特徴がある。 ある分野はそれを担った人物を中心に縦横に論じられ 皮革、 活字、 装飾、 『井ルヤム・ 出版に関する様々な分野、 染織、 民芸運動や柳との関わりで、 ブレイク書誌』という一 製紙業と、 非常に広範囲 近代化の過程 印 刷

七五

立命館大学大学院文学研究科博士論文審查要旨

心は、 述は、 冊の書物について、その構想の胚胎から、制作に関与する人的ネットワー この点は非常に高く評価できると考える。 学の泰斗すら免れなかった「誤認」の必然を、意味深く開示している。 単に民藝運動初期の各論的問題を掘り起こしただけでなく、 と誤って認識していた「局紙」について論じる箇所(四〇頁以降の数頁)は、 書の本文用紙として用いられながら、 究者の追従を容易には許さないであろうレベルに達している。また、 製本過程を経験的に知る筆者によってなされた、同書装丁の諸特徴の記 クの形成、 ですらある諸視点と手を結び、さながら一編の推理小説のように、 近代産業史に新たな光を当てる一試論となりえている。ここで筆者の関 るように論じており、 美的 類似する視点からの先行研究を持たないばかりか、 材料の調達、 (工芸論的)、 論文全体の白眉となっている。なかでも、 歴史学的、 技術面の克服などに至る諸点を緊密に練り上 社会学的、そして広義には政治学的 著者の寿岳文章自身が「鳥の子」 今後も他の研 同時に日本 実際の 同

刷史、 を試み、 ている。この点に関する論者の構想力は評価されるべきである。 いるため、全体をつらぬく主軸は読むものによく見えるように提示され く記述を進めているが、 常に意識しながら論述を進めている。それは書物を「建築」としてとら さを感じさせる。 える考え方で、 査を通じて、 として「白鞣し革」、 本論文では柳や寿岳が理想の本を作ろうとして、例えば表装用の皮革 あるいはウイリアム・モリスの書物を意識し、 装丁史などに深く分け入り、 理想の活字を追求したが果たせなかったことなどが、具体的調 詳細かつ綿密に描かれ、それが文学的とも言えるおもしろ 様々な要素の有機的つながりを重視していた。 しかし論者は柳宗悦が書物をいかにとらえていたか、 鹿革などを吟味し、 柳の根本的な思想に注意深く目配りを効かせて 細かな部分をおろそかにすることな 最後に楽器用の牛革を用い 黒と朱の二色印刷 論者は印 た

ただし本論文に欠点がないわけではない。まず初めの部分で「民芸運の留所もある、などの点である。

七六

試験または学力確認の結果の要旨

で行われた。傍聴者は9名であった。 本論文の審査は七月六日、13:30より15:30まで、学而館第一研究室

を十分に示していると評価できる。ていて、文意は明快であり、読みやすく書かれており、論者の論証能力本論文は実地調査の報告部分を含んでいるが、全体的に良く整理され

にも通じていて、その知識が論述に生かされていた。確に答えていた。また実際に皮革を使った製本をするなど、出版の実務確に答え、出版に関する諸分野の知識も豊かで、その質問においても的論者の民芸運動や美術史、工芸史に関する知識は豊富で、質問にも的

と認めるものである。 条第一項により、博士(文学 立命館大学)の学位を授与することを適当条第一項により、博士(文学 立命館大学)の学位を授与することを適当当審査委員会は、これらの点を総合的に判断し、本学学位規程第十八

竹 山 博 英

イタリアの記念碑墓地 ―その歴史と芸術―』

学位の種類 士 (文学)

授与年月日 二〇〇八年九月十二日

查委員

主査 北 村

稔

副査 檜 枝 陽一 郎

副査 石 井 元 章

論文内容の要旨

『イタリアの記念碑墓地―その歴史と芸術』(言叢社、二〇〇七年六月) [B

5版、三一六頁

籍を出版している。 著者の竹山教授は、 すでに、イタリアの文化と社会に関する多くの書

を、 割を果たしている。 究はこれまでに存在せず、 リア全土を自らの足でめぐり、自らが撮影した五百点以上の図版 な彫刻が施され多くの彫像を配した墓所(お墓)が存在している。 を集積し、各地の都市に存在する記念碑墓地をこのような形で論じた研 本論文はこれらの業績の基礎のもとに、イタリアに特有の記念碑墓地 歴史と芸術性の両面から論じたものである。記念碑墓地には、 本論文は新しい研究分野の先駆者としての役 (写真) 多彩 イタ

本論文の構成は以下のとおりである。 第二章以下の章題は、 記念碑墓

立命館大学大学院文学研究科博士論文審查要旨

は、 地の所在地の都市名である。また、引用文中に見られる省略記号(・・・) 報告者の北村が付した。

まえがき

第一章 墓地の歴史 Storia del cimitero

第二章 トリーノ Torino

第三章 ジェノヴァ Genova

第四章 ミラーノ Milano

第五章 ブレシャ Brescia

第六章 ポッサーニョ Possagno

第七章 ヴェネツイア Venezia

第八章 ボローニャ Bologna

第九章 フェッラーラ Ferrara

第十章 フィレンツエ Firenze

第十一章 ルッカ Lucca

第十二章 ピーサのカンポサント Camposanto di Pisa

第十三章 ナポリ Napoli

第十四章 カターニャ Catania

第十五章 バーリ Bari

第十六章 ローマ Roma

は、大学の南側に広がっていた墓地に興味をいだき、足しげく通うよう んだのかを、説明する。四半世紀まえにローマ大学に留学していた著者 著者は「まえがき」で、なぜイタリアの記念碑墓地を研究の対象に選

になる。

ではないのかという探求心に促されていた。そして著者は、イタリアの 寂しい」日本の墓地に比べて、イタリアの墓地が、あまりにも違う存在 著者の興味は、 子供時代と学生時代を通じて見知っていた 「静かで物

な状況を呈していることを見出し驚いてしまう。墓地におびただしい数の彫刻作品があり、あたかも野外の美術館のよう

群がびっしりと連なっていた。 だが、それ以外に天使やキリストなど、宗教的テーマの作品もあった。 じられた。・・・・ 葬るのではなく、 やされていた。たしかに死者を葬る不吉な空間ではあるが、 それはみな各家族の墓所なのである。とてつもない富が死者のために費 ではなく、小さな教会としか思えないような建物もたくさん並んでいた。 どの芸術作品が集中しているのは驚きだった。また個々の芸術作品だけ られ、そこにはモニュメントとしか言いようのないすばらしい彫刻作品 それが緑あふれる広大な空間にずらりと並べられていた。 著者は次のようにいう。 死者を悼み、 「彫刻作品は故人の姿を刻んだものが多い イタリアは芸術の国だが、墓地にあれほ 死者に敬意を捧げる意図がはっきりと感 また回廊が作 死者を単に 0)

とえば貝殻、たいまつ、花輪などだ。・・・・がに写真がはめ込まれている。・・また様ざまな装飾が付いている。たる。・・・実際に墓石が語りかけてくるわけではない。・・まず多くの墓イタリア人は概しておしゃべりだが、墓所も同じように饒舌なのであ

なことである。

で関して、いろいろと考える糸口を提供してくれる。これはとても貴重に関して、いろいろと考える糸口を提供してくれる。これはとても貴重て様ざまなことを考えさせられた。イタリアの墓地は人間が生きること一方的にせよある種の会話ができるのは奇妙な経験であり、人生についとても肯定的なものに感じられた。こうしてまったく知らない死者と、れてしまうのだ。それが墓地の持つ饒舌性である。これは驚きだったが、東するに目に入ってくる様ざまな要素があり、その意味を考えさせら

て墓地とはどういう場所なのか。どのように作られ、どのように機能しこの本を書くに至った動機はまさにこの点にある。イタリア人にとっ

のような意味をもつのか・・・・。」ているのか。そしてそれはイタリア人だけでなく、そこを訪れる人にど

七八

する。以上の動機に促され、著者はイタリア全土の記念碑墓地の探索に出発

に説明される。第一章では、イタリアの記念碑墓地の背景にある歴史的経緯が、簡潔

る。り、記念碑墓地はイタリアの長い歴史においては、新しい風習なのであり、記念碑墓地はイタリアの長い歴史においては、新しい風習なのであそれによれば、今日のような記念碑墓地の出現は二百年来の状況であ

ちの墓地は都市の外に設けていた。である墓地を峻別していた。そして初期のキリスト教徒たちも、自分た墓地を都市の外につくり、生者の生活空間である都市と、死者の居場所古代のイタリアにおいては、エトルリア人もローマ人もギリシア人も、

壁の下に葬られ、庶民は外壁の下や中庭に葬られるようになる。と、信者たちは魂の救済をもとめて聖人たちの葬られている教会のなると、信者たちは魂の救済をもとめて聖人たちの葬られている教会のと、変化しはじめる。教会の建物が公然と都市の内部に作られるようにこの状況はキリスト教が公認された三一三年の「ミラーノ勅令」のあ

、、。墓地の状況が、イタリアのみならず、ヨーロッパ各地でも18世紀まで続には墓碑はなく、穴の中に複数で埋められるだけであった。このような工侯貴族や聖職者は石版の墓碑により個人が特定されていたが、庶民

教会内部の遺体は定期的に掘り起こされ、骨だけが別の場所に保管さされた大量の遺体が存在することから発生する衛生上の問題であった。墓地の状況に変化を促したのは、城壁で囲まれた都市の内部に、土葬

の周辺にただよい、ミサさえ行えない状況が出現する。が、数量の増大とともに土中で骨となる時間が確保されず、異臭が教会くなった。古い遺体が掘り起こされた場所には新たな遺体が埋葬されたれた。しかし時代とともにその量は増加し、適切な管理と保管ができな

高まってきた。

「いが行われ、医師たちが活発な議論を展開し、墓地を郊外に移す気運が行されなかったが、これをきっかけに、新しい墓地建設計画のコンクーを禁止し郊外に墓地を建設せよという布告を出すに到る。この布告は実を禁止し郊外に墓地を建設せよという布告を出すに到る。この布告は実

位聖職者などの例外を除いて認められなくなった。
れ、都市郊外での墓地の造営が検討され始めた。教会内への埋葬は、高ア、スエーデン、イタリア、スペインなどの各地でも同種の法令がださだねられることになった。そしてこれに連動して、ドイツ、オーストリフランス全土で教会内への埋葬を禁じ、墓地の造営と管理は市当局にゆこのあと一七七六年になり、ルイ16世が勅令を発し、パリだけでなく

b その勢力を弱体化しようとした。 外への移転を促進した。 の官僚制度を整備する一方で、 トリアのヨーゼフ2世などの啓蒙絶対君主と呼ばれた国王たちは、 郊外に移転させることは、 この誕生から死までを管理する権限を持っていた。墓地を教会の内部か さらにこのあと、 18世紀後半に出現した啓蒙思想の普及が、 当時、 教会が持っ プロイセンのフリードリヒ2世やオース 貴族や教会の伝統的既得権を廃止して、 当時、 カトリック教国では、 ている人間 の死にかかわる権限 墓地 教会は人 国家 0) 郊

の基本政策の一環であった。を奪うことであり、国家が教会を管理下におくという、近代的世俗国家

者の貴族や国王により、様々な新しい墓地が建設され始めた。現していなかった18世紀後半のイタリアにおいても、多くの都市で支配以上のような社会的変化のなかで、未だ全土を統治する統一国家が出

で飾られ、埋葬者の死と生のドラマを象徴的に示すことになった。とめる民衆の願いや、貴族たちの自己顕示欲、更におりから勃興していた新古典主義とよばれる芸術様式が互いに影響しあい、今日みられるような記念碑墓地が、数多く出現することになる。すなわち、教会とはような記念碑墓地が、数多く出現することになる。すなわち、教会とはような記念碑墓地が、数多く出現することになる。すなわち、教会とは当の場所にあるが、墓地の内部には宗教儀礼用の教会も作られており、といる記念の墓所は、いずれも古代芸術の影響を強く受けた多くの芸術作品をいる。

装飾の背景に存在する様々な人間の営みを読み解いてゆく。それぞれの都市における特色ある記念碑墓地を紹介し、墓所に施された以上の背景説明のあと、著者は北から南までイタリアの全土をめぐり、

第二章 トリーノ

な内容の全貌が典型的に示されているからである。 通じた特色ある墓所が存在し、イタリアの記念碑墓地の変遷とその多彩ら南にかけてイタリアを縦断する著者の研究旅行の出発点に当たっていら南にかけてイタリアを縦断する著者の研究旅行の出発点に当たっているとにもよる。しかし最大の理由は、トリーノの地理的位置が、北かの墓地を論文の最初に取り上げたのは、トリーノの地理的位置が、北かり、カール・リーノは北イタリアの西部に位置する都市である。著者がトリーノトリーノは北イタリアの西部に位置する都市である。

型を用いて、第三章以下で論述される、各都市の墓地内の墓所に対する著者は第二章において、トリーノの墓地内の墓所に示される様々な典

読み解くことである。はそれらの彫刻や彫像により意味されるイタリア人の死に対する心性をさらにこれらの作品を作り上げた作者の社会的背景を分析し、最終的にその研究方法とは、墓所に施された彫像や彫刻の芸術様式を確認し、

著者はいう。「墓所の主題のかなりの部分は死の表現に関係している。本書では各地の墓地を論じながら、なるべく特色のが表現されている。本書では各地の墓地を考察する上で最も興味深いからだ。なるべく全体的なイメージをつかめるように提示したい。なぜなら死をなるべく全体的なイメージをつかめるように提示したい。なぜなら死をある主題を取り上げることで、イタリアの墓地を論じながら、なるべく特色のある主題を取り上げることで、イタリアの墓地の本質に迫るつもりである。」

容紹介においては、第二章に焦点を絞り、詳しく紹介したい。型となっており、他の章の内容を髣髴させている。それゆえ本論分の内重厚な累積である。そして第二章が、論文全体を通じた論述と分析の典の都市に存在する夥しい数の様々な墓所に対する、著者の論述と分析の典以上の言葉に端的に示されるとおり、本論文の構成は、イタリア全土

リア北 数を提示し、 章から第十二章、 て紹介したい。そしてグループごとに、 三章から第十六章までの内容紹介では、全体を第三章から第七章、 された論述と分析の様々なバリーションである。 グループ分けは、 ちなみに第二章に続く第三章から第十六章までの各章は、 部 イタリア中部、 その中から特筆すべきと判断した墓所を紹介する。 第十三章から第十六章までの3つのグループに分類し 各章が対象とするそれぞれの都市の位置する、 イタリア南部という地理的分類にほぼ対応す 扱われている図版の数と墓所の 紙面の制約もあり、 第一 なおこ 一章に示 イタ 第八 第

る。

八〇

リアの歴史と文化への深い知識に裏付けられている。その語り口は実際に訪問した著者ならではの臨場感にみちており、イタ著者は第二章で、まず都市としてのトリーノの特色から語り始める。

る。 レ広場 町のにぎわいに身をゆだね、 に入る時の通過儀礼となった。 イタリア語で「ポルティコ」 道路は片側3車線ほどの広さがあり、直角に交わっていて、見通しも るのである。 アで4番目の大都市だ。そしてミラーノに次ぐ第2の の町に来るとまずローマ街を北上して王宮まで歩き、 コに沿って優雅な店がショーウインドーを連ねている。・・・ に雪がふるためだろう、 ランス語に似たトリーノ方言の会話が聞こえてくる。 トリー クリーム色の外壁の王宮が堂々とそびえ立つのが見えるのである。・・・ いのだ。・・・さらに道をすすめば、サヴォイア王家の王宮があるレアー がりくねっているところが多い。だがトリーノではそういうことはない 著者は次のように言う。「トリーノの町はイタリアの他 ある際だった特長を持っている。・・町並みが整然と整えられて ノは豊かな町だ。・・カフェーに座ってコーヒーをすすれば、 図 1 ・・・イタリアの町では、 に出る。 この広場も広々としていて、 アーケードが発達している。 (図2) という。・・中心街ではこのポルティ 人々の会話に耳を澄ます。 トリーノは人口が92万を数える、 古い歴史的地区は道が狭く、 このアー • 噴水の向こうに、 町を肌で感じる。 工業都市でもあ これがトリーノ トリー 0) 町と比 ケードは トリーノ ・ノは冬 べる フ 曲

紀のイタリアでは中小国家が各地に乱立していたが、・・自分たちの統代を経て、一二八〇年にサヴォイア王家の領土となった。・・・・19世続いて著者はトリーノの歴史を語る。「トリーノは・・自治都市の時

更され、後にはローマに移されるのである。・・・・」をおった。だがわずか3年後の一八六四年に、首都はフィレンツェに変新国家、イタリア王国の国王となった。そしてトリーノが新国家の首都にますることになった。その新国家の誕生に大きく寄与したのがサヴォンがで展開され、激しい戦争も行われたが、一八六一年にイタリア国が一国家を望む声が高まった。それは「リソルジメント運動」として様々

に取り上げるのには都合がいい。・・・トリーノの墓地の入り口 を囲っている。 らに入り口の側に事務所風の建物がある。そして高い塀が長く伸びて中 を4本連ねた小さな神殿風の建物がある。その両側に入り口があり、 は人口92万人の大都市にしてはやや物足りない。 りあって、イタリアの墓地の基本的な構造をふまえている点でも、 多い。トリーノはその点、 だ。・・古いものから新しいものまで、時代ごとに特色ある墓所が作られ 大きな切れ目や断絶がない。 ノに比べるとある特定の時期に芸術性の高い墓所が集中しているもの トリー 「トリーノのモヌメンターレ墓地は、イタリアを代表する墓地の一つ の記念碑墓地について、 バランスがいい。また回廊形式の部分がかな 本書で扱われる様々な都市の墓地はトリー 筆者は次のように述べてい 正面にドーリス式の柱 **図** 初め 4 さ

例が多く、 する場ともなったのだが、 の中庭に葬るようになった。 に作られていた。・・だがキリスト教徒はその習慣を破り、 史を考えてみると、 しを願ったのである。・・・教会は祈りの場である以外に、 イタリアの墓地は回廊を強く意識して作られている 信者はその聖人の近くに葬られて、死後の魂の救済のとりな キリスト教以前の時代は、墓地は都市の城壁の外側 初期の教会は聖人の墓所の上に立てられた 教会の中庭は概して回廊で囲まれてい (図 5)。 死者を埋葬 死者を教会 墓地 0 る 歴

るが、各地に回廊を利用した墓所の例は残っている。」
て、墓所にしたのである。その代表的な例はピーサのカンポサントであて利用された。床や壁に石碑をはめ込んだり、古代の石棺を並べたりしきな穴をほり、死者を葬ったのだが、開廊の部分も墓所を作る空間としの場としてつかわれていたが、墓所としても使われた。回廊の中庭に大の場とした空間である。この場は修道院なら修道士の瞑想、勉学、仕事ようにした空間である。この場は修道院なら修道士の瞑想、勉学、仕事ようにした空間である。

の形式について分類している。イタリアにおける遺体の処理方法と、記念碑を持つ墓所を含む墓所全体著者はこのあと、墓所の具体的な記述に入るのであるが、その前に、

あった。火葬にして体がなくなれば、復活できないのである。これはキリスト教の復活思想と関係があるのではないかということでは3%ほどであるという。論文審査の質疑応答での著者の答えによれば、著者によれば、イタリアでは、ほとんどの遺体は土葬にされる。火葬

ければならない。 土葬の伝統的方法に従えば、2メートル以上地面を掘って棺を埋めな

側の鉛の棺は縁がはんだ付けされ、遺体は完全密封されるという。は鉛で作られた二重構造である。外側の棺は蓋が釘付けにされるが、内が一般化しているという。その際に使用される棺は、外側が木製で内側に作られた地下室か、あるいは地上に立てられた壁の中に安置されるのしかし最近では、棺を直接に土中に埋めるのではなく、棺は墓所の下

墓所と、別々に屋外に設置される墓所の、二種類に分類する。墓所の分類については、著者はまず、回廊を利用した壁式の集合的な

つもの棺を何段かに積み重ねて壁面に納める多段式の墓所がある。いう壁式の墓所には、壁に彫刻を施し壮麗な墓所とする記念碑型と、いく

立命館大学大学院文学研究科博士論文審査要旨

所に分類する

次に別々に屋外に設置される墓所について、著者は石碑式と家式の墓までもなく前者は富裕層向けであり、後者は一般庶民向けである。

あることはいうまでもない。だけのシンプルな墓所である。前者が富裕層向けで、後者が庶民向けで大なモニュメントをつくる墓所であり、単純型は地面に石の板を置いた大なモニュメントをつくる墓所であり、単純型は地面に石の板を置いた

かかるため、富裕層向けである。 電新しい建築様式で建てられたものである。そして家式の墓所は費用が神殿式は古代の神殿を模したもので、現代建築型は、前の二つとは異ない。 型は小さな教会のような外観を呈し、壁の部分や地下室に棺を納める。 型は小さな教会のような外観を呈し、壁の部分や地下室に棺を納める。

ていた。 象概念を人間で表現する時、 象的な概念を目に見える図像で表現することが行われていた。 には3体の女性像が見える。・・・この3人の女性はいったい何者なの 満ちている気がするのだ。それはなによりも墓地に優美な女性像があふ つまりある事物を直接表現するのではなく、 か。・・・この疑問はイタリアの芸術表現の一つであるアレゴリー 口 投じた慈善家、 たちはほとんどが女性だ。・・・トリーノの墓地を建設するのに私財を れているせいだろう。 なぜか女性的な感じがする。 の墓所を見てみよう。 著者はイタリアの墓地について次のようにいう。 特に教会では、 について学ぶまで解けなかった。・ カルロ・タンクレディー・ファッレッティ・ディ・バロ 嘆き悲しむ人、祈る人、そして天使。 この墓所は壁式の記念碑型の墓所である。 字を読めない信者にも分かるように、 優しさ、華やかさ、優雅さといった要素に つまり擬人化する時は、 別のもので暗示的に表現す ヨーロッパでは古来、 「イタリアの 女性の姿で表現し こうした人 宗教的美 そして抽 (寓意)、 墓地 そこ 抽 は

> あり、 望をもち、 の女性像は、この3つの対神徳の寓意表現である。 る。・・ 姿勢は取っておらず、 である。・・彫像は新古典主義の影響下にあり、 れた女性は 1, を持っているので「希望」を表している。中央の女性は顔をベー ルロ・タンクレディー・ファッレッティ・ディ・バローロ つまりキリスト教徒として尊重すべき最重要の徳とされたのである。 は2つの壺を持つ女性で表していた。キリスト教では7つの徳が重要で 徳を寓意で表していた。 手に聖餐杯を掲げているので「信仰」を示す。 特に「信仰」「希望」「慈愛」の3つは対神徳として重視された。 慈善事業に力を尽くした、故人の生前の徳をたたえているの 「慈愛」を表す。つまり3体で、 3 角形の構図の中で安定しているように見え たとえば 「正義」 は天秤を持つ女性で、 信仰に厚く、 無理な動きや不自然な 左側の女性は手に錨 小さな子供を2人連 神の救いに希 の墓所の3人 -ルで覆 カ

収めた。 1) ポルケッドゥ この墓所は無一文からたたき上げた建築業者ジョヴァンニ・アントニオ 義、 の最新技術だった鉄筋コンクリートを使って建物を次々に建て、 は 墓所はリベルティ様式(アール・ヌーヴォー様式) わせる。イタリアの19世紀の彫刻は、 雅さを見せている。 われている・・・・女性はみな古代風の裾の長い服を着て・・ 後 サルデーニャ島出身で、 ファッレッティ・ディ・バローロの墓所が作られてから、 0) 象徴主義、 ノの墓地の中で最も美しいものの一つだろう。 九一二年に、 一そして一八九二年にアマリア・ダイネーシと結婚し、 (一八六〇-リベルティと様式がかわったのだが、 流れるような服の表現はアール・ヌーボー様式を思 ポルケッドゥ家の墓所が作られた。・・ 苦学しながらトリーノで大学を卒業し、 一九三七)が建てたものである。 新古典主義、 の時期のものだ。・・・ 壁面は 口 ポルケッドゥ マン主義、 ジョ モザイクに覆 おそらくト およそ70 7人の子 ヴァンニ 憂鬱な優 成功を 自

像を制作し、背景のモザイクはジュリオ・カサノーヴァが担当して、ルビーノ(一八七一−一九五四)に墓所の設計を依頼した。ルビーノは彫だった。ジョヴァンニはこの早すぎる死を悼み、彫刻家のエドアルド・を得た。しかしアマリアは10年後の一九○二年に亡くなった。まだ39歳

一九一二年に墓所が完成した。・

れる都市であるが、第五章のブレシャを取り上げてみたい。

でいる。ジェノヴァやミラーノさらにヴェネツイアは日本でもよく知らが行われ、全部で一三六の図版が含まれ、一○○近くの墓所が分析され足で確かめた各都市の歴史が入念に説明される。次に墓地と墓所の分析とで確かめた各都市の歴史が入念に説明される。そして著者が自らのお行われ、全部で一三六の図版が含まれ、一○○近くの墓所が分析される。第三章から第七章までは、第三章ジェノヴァ、第四章ミラーノ、第五

ザナルデッリの墓所である。

ボサルデッリの墓所である。

「した九二-一八六五」が一生を費やして作り上げた壮大なモニュメンニ (一七九二-一八六五)が一生を費やして作り上げた壮大なモニュメントである。墓地内の14の墓所が分析されているが、多くの墓所は何々家トである。墓地内の14の墓所が分析されているが、多くの墓地は新古典様式シャのヴァンティーノ墓地を分析の対象とする。この墓地は新古典様式シャの草がとして存在する。しかし、個人のためだけの墓所もある。著者はブレミラーノに次ぐロンバルディア州有数の工業都市である。著者はブレブルデッリの墓所である。

いる。その左には麦の刈り束に座って、難しい顔をして本を読んでいるその後ろに労働用の前掛けを着た父親がいて、母親の額に口づけをして「家族と労働」と題されている。中央に乳飲み子を抱えた母親がいる。著者は次のようにいう「この墓所は5体のブロンズ像からなる群像で、

立命館大学大学院文学研究科博士論文審查要旨

る。 晩年はローマに住み、 いた。 際に、 の製作を友人であったヒメネスに頼んでいた。ヒメネスはシチリア島 歩みを表現し、 群像の背後の壁には、 少年がいる。 れてしかるべきである。 る。 十一人の子を育てたという彼の母と父の顔を彫像に映したとされてい マで親交を結んだと思える。ヒメネスはザナルデッリの意向をくみ を学んだ。自然主義から出発して、 パレルモ出身の彫刻家で、パレルモ、ナポリ、フィレンツェなどで彫刻 表していると思える。この群像は全体で、新しい国家を作った政治家の 族」をはぐくむ家庭こそが社会の基礎であり、よりどころであることを ようとしている母と、後ろにやさしくつきそう父は「家族」の象徴で、「家 とが豊かな社会形成に役立つことが示されている。 を読む少年は麦束の上に腰掛けている。麦は豊穣の象徴で、 はなく、知識や文化で社会を建設すべきことを表していると思える。本 に捧げる花とされている。ザナルデッリは愛国者で、 この作品は自然主義的だが、 ブレシャの墓地で、 剣を折っている少年と、 武装蜂起に参加したこともあったが、もともとは法律家を志して そして右には膝で剣を折ろうとしている少年がいる。 故人の功績をたたえている。ザナルデッリは生前、 その墓所もローマにある。 菊の花畑が描かれている。 最も芸術的にすぐれている作品の一つにあげら 本で勉強している少年は、 群像に象徴的意味づけが付与されてい 象徴主義的作風で一世を風靡した。 菊はイタリアでは ザナルデッリとは 子供に乳をふくませ 国家の統 もはや武力で 本を読むこ 一運動 墓所

解説される。そして一〇〇以上の墓所が分析の対象となり全部で一六三で構成される。はじめに各都市の歴史が入念に説明され、現在の特色が第十章フィレンツエ、第十一章ルッカ、第十二章ピーサのカンポサント、第八章から第十二章までは、第八章ボローニャ、第九章フェッラーラ、

第十章のフィレンツェでは14の墓所が分析の対象となり、全部で二〇点の図版が含まれる。その中から、フィレンツェを取り上げてみたい。

があ ヴィーニ家の墓所である。 ンズ製の棺が作られ、 ンマーゾ・サルヴィーニは一九一五年に亡くなったが、 職業を表している。 監督という、 国際派の俳優だった。 ている。この墓所の依頼主はトンマーゾ・サルヴィーニ(一八二九-ポ イタリアだけではなく、 一九一五)である。 いずれも嘆き悲しむ女性だが、演劇の仮面を足下に置いたり、手に持 一八六九年に建てられたもので、 点の図版が含まれる。著者はフィレンツェの代表的な記念碑墓地として ノ・ファルチーニである。建物には2枚の浮き彫りがはめ込まれている。 モヌメンターレ墓地で、 ・ルテ・サンテ墓地を取り上げる。そして次のようにいう。「フィレンツェ 浮き彫りの女性は演劇の仮面とともに描かれている。 ŋ, そ の背後にブロンズ製の棺が置かれている。この墓 演劇一家だった。トンマーゾは家族のために墓所を建設し 彼は19世紀に活躍した最も有名な舞台俳優の1人で、 生前の功績をたたえ、死を悼んでいるのである。 両親も俳優であり、兄も息子も俳優で、 墓所の背後に置かれた。この棺の上にも仮面が彫 イギリス、アメリカでも公演し、 古代風の、四角い、がしりとした造りの建物 最も古いものの一つとされているのが、 建物を設計したのは建築家のマリアー 彼のためにブロ 成功を収めた つまり仮面は 孫は舞台 所は サ }

される。全部で一五二点の図版が含まれ、一〇〇以上の墓所が分析され部に位置している。各都市の歴史と現在が解説され、墓地と墓所が分析ある。ローマがイタリア中部にあるのを除けば、他の都市はイタリア南第十五章バーリ、第十六章ローマ、から構成される本論文の最終部分で第十三章から第十六章までは、第十三章ナポリ、第十四章カターニャ、

ているが、シチリア島にあるカターニャを取り上げてみたい

八四

すると何かが・・・ ま者は一九九四年に刊行された代表的著作である『シチリアの春』(朝著者は一九九四年に刊行された代表的著作である『シチリアの春』(朝著者は一九九四年に刊行された代表的著作である『シチリアの春』(朝

行けばいいか、 り変わり、 びえている。カターニャにくるたびに、エトナ山を拝んできた。 エトナ山がそのきっかけだった。エトナ山を見て、目が覚めた。どこに ない。だが昔にもどる瞬間がある。そうしたきっかけを作るものがある。 はもう若くない。そして今度は墓地を調べに来ている。 とが脳裏によみがえってきた。またシチリア島にやってきた。 たばたと調査したことがあった。そうした若い時の自分がいた。 よみがえってきた。カターニャだけでなく、シチリア島を歩き回 とをすっかり忘れていた。だが実際にエトナ山に接すると、 エトナ山だ。雪をかぶっている。・・ 人間は簡単に歳を取る。普段はそうしたことを気に留めてい 何をすればいいのか、すぐに分かった。」 信じられないほどはるか高 人の世の中は移 昔の自分が だが自分 そのこ 成みにそ そのこ

ぐれた墓所を探したのだが、 は次のように言う。 り多く発見できなかった。 が抱えてきた南と北の社会的格差への思いが強く反映されている。 析で見られた彫像や彫刻の芸術性に対する関心よりも、 てカターニャの墓所に対する著者の分析には、 カターニャでは、 四四点の図版を基礎に31の墓所が分析され 「カターニャの記念碑型の墓所の中から芸術的 それは前にも述べたように、 都市の人口や墓地の大きさの割りにはあま 北部の各都市の墓所 イタリアの歴史 屋外では、 る。 そし 特に の分

る。 端緒についたばかりなのだ。」 は存在する。 うことになる。 のだろう。そうした意味で、 業も発達している北イタリアの彫刻家のほうが名を売る機会が多かった 家には全国的に名の知られていないものが多い。経済的に豊かで、 いう機運がまだ十分に盛り上がっていない。 タリアとはまた違った現実と、違った芸術表現が、南イタリアの墓地に して南イタリアでは墓地の調査自体も快く許可しない風潮がある。 カターニャの墓地には取り上げた以外にも、まだまだ興味深い墓所があ そうした墓所をくまなく調査できればと思うが、カターニャのみな 南 の彫 イタリアでは墓所の建立に関わる文書の調査は難しい。 刻の保存が難しいためだと思える。・・・ その価値は大きい。 南イタリアの彫刻家の評価は今後の課題である。 南イタリアで活動するものはハンディを負 だが社会全体でその価値を認めようと 南イタリアの墓地の研究は 南イタリアの また概 北イ 出 彫 刻

石の固 いる。 墓所は墓地の中央部分にある。 を持っている。 れているが、 しいアーチの一部が残っている。 した石材の堆積に見える。火山岩の石段があり、左側に教会の入り口ら て、そこにさりげなく、 人は背中に大きな翼を持っている。そして右手にハンマー、 著者はカターニャで最も印象に残った墓所について次のように述べて 老人はしわだらけの顔に長いひげを生やしている。 :4枚はめ込まれているのが見える。 「それはディステファノ・ジュッフリーダ家の墓所である。 表情ははっきりと読み取れない。 .まりが積み重なっている。そして右側に1人の老人が腰掛けてい 残っているのはほんの一部分である。そして階段の奥には 老人の反対側に回りこむと、教会の外壁が一部残ってい ディスファーノ・ジュッフリーダ家の人々の肖 この墓所は一見すると、ごちゃごちゃと 入り口の壁や柱には美しい彫刻が施さ 裸体の体にもしわが見える。 名前は書いていない。 鼻が欠けている 左手にのみ この墓所 この 老

> も止められない。 姿で表現される。 具人化である「時の老人」は、 み込む。その破壊の様が、 ターニャ出身で、 この場合、 眺めている。 老人」がこうした役割を負うのは珍しい。老人は壊れた建物を憂鬱げに いる。老人は石に故人の栄光を刻む役割を果たしている。・・・・「時の 大鎌と砂時計がみえない。その代わり、老人はハンマーとのみを持って 時計も持っている。 立派な大聖堂でも例外ではない。 だ。老人は を作ったのはカルメーロ・ 弱い人間の心を持たされている。」 「時の老人」である。 自らの所行を後悔しているような風情だ。 その鎌ですべてをなぎ払い、破壊するのだ。 主に地元で活躍した彫刻家である。 その非情な真理を嘆くのが人間なら、 時が過ぎ去ることの象徴である。 無造作に積まれた石材で示されている。 フローリオ ふつう背中に翼を持ち、 時はえり好みせずにすべてを壊し、 無常な時の流れはすべてを破壊する。 (一八八七-一九七五) 墓所の主題は明 だがこの墓所には 大きな鎌を持 時 時の老人」は の流れは誰に であ また、 る。 時 砂 飲 力

で満たすのもまたイタリア人なのだ。」 のがイタリア人ならば、 違 食家という型にはまったイメージがあるが、そうしたイメージとはまた 触の場を作る意欲があるのである。イタリア人は陽気で、 栄だけによるものではない。 ているのかよく分かるだろう。それは単に、家名を知らしめるという見 イタリア人がどれだけの情熱と財力を傾けて、 つった、 筆者は本論文の終わりを、 イタリア人のある種の究極の姿が墓地に見える。 人生に省察を強いる場を作り、 古代からの伝統に沿って、 以下の言葉で結んでいる。 墓地を芸術作品で満たし 生者と死者の接 「本書をみれば、 そこを芸術作品 楽天的 人生を楽しむ

論文審査の結果の要旨

学而館第一研究室で行われた。本論文の公開審査は六月十六日(月)の午後1時半から3時半まで、

はじめに、学内からの審査委員である主査から、論文内容の紹介があった。続いて主査から論文の構成に関する質問があり、注および文献目録た。続いて主査から論文の構成に関する質問があり、注および文献目録からなのか、についてガイドブックのある場合はそれを使用し、彫刻家辞個々の墓地についてガイドブックのある場合はそれを使用し、彫刻家辞書なども調べたが名前だけで事績が不明な場合もあった、というもので献にからなのか、についてガイドブックのある場合はそれを使用し、彫刻家辞とうなのか、についてガイドブックのある場合はそれを使用し、彫刻家辞とうなのが、これらの文献目録が、続いて主査がら、論文内容の紹介があっまった。

るのは大変であった、というものであった。ており、勢い力点の置き方がまちまちとなり、全体像としてまとめあげこれに対する著者の回答は、各地で新しい墓所と古い墓所が入り混じっさらに主査から、墓所を取り上げる際の基準について質問があった。

行われた結果、審査委員会は本論文に対して以下の評価を下した。このあと主査および副査と論文提出者のあいだで、種々の質疑応答が

文化論である。この評価を支えるのは次の三点である。
念碑墓地を通じてイタリア近代史とイタリアという国を考察した稀有なにイタリア各地の墓地に関して記述をなした本というだけではなく、記今回、博士論文とすべく提出された『イタリアの記念碑墓地』は、単

今回はこれがイタリア全土に敷衍されている。著者が一九九四年に刊行した『シチリアの春』で示した手法であるが、第一に、著者が自らの足で回り、自らの言葉で語っている点。これは

きる。
をの上で各墓所を通じてその町に生きた人々の人生を振り返ることがで観しており、読者は自然にイタリア諸都市に関する基礎知識を与えられ、者の説明は各都市の特徴を浮き彫りにするとともに、各都市の歴史を概 第二に、フィールドワークから生まれる説得力のある叙述である。著

八六

る。 第三は収録されている豊富な図版である。通常は様々な制約から図版 第三は収録されている豊富な図版である。通常は様々な制約から図版 第三は収録されている豊富な図版である。通常は様々な制約から図版 第三は収録されている豊富な図版である。通常は様々な制約から図版

次に、細部の問題点として以下の諸点を指摘しておきたい。

墓碑以外の作品にも触れてほしかった。を入れることが奨励される。また彫刻史において重要な作家の場合には、を入れることが奨励される。また彫刻史において重要な作家の場合には、という記述が多く見られるが、我々からみて「右側」なのか、彫像や彫原語を入れてほしかった。墓所の状況を説明するさいに「左側」、「右側」 埋葬者の名前は図版に原語が入っており判明するが、墓所の作者名も

の考察がなされたならば、本論文は一層興味深いものとなったであろう。ロッパの彫刻史、絵画史との比較、さらにはイタリア彫刻の伝統の中で彫刻の解釈に、やや不正確な記述が散見された。同時代のイタリアやヨーこのほか美術史からみて、ごく少数の事例であるがいくつかの彫像や

試験または学力確認の結果の要旨

まで学而館第一会議室で厳正におこなった。審査委員会は、提出論文の審査委員会は二○○八年六月十六日(月)午後1時半より午後3時半

と認めるものである。 と認め、本学学位規程第二十五条第一項により、これに関わる試験の全部をめ、本学学位規程第二十五条第一項により、これに関わる試験の全部を必要した。 と認めるものである。

瀬口真司

西日本縄文集落の研究

学位の種類 博士(文学)

授与年月日 二〇〇八年九月十二日

查委員

主査 和 田 晴 吾

副査 泉 拓良

副査 矢 野 健

論文内容の要旨

構成されており、以下、各章ごとに要旨を述べる。

構成されており、以下、各章ごとに要旨を述べる。

構成されており、以下、各章ごとに要旨を述べる。

株立れており、以下、各章ごとに要旨を述べる。

株立れており、以下、各章ごとに要旨を述べる。

株成されており、以下、各章ごとに要旨を述べる。

株成されており、以下、各章ごとに要旨を述べる。

株成されており、以下、各章ごとに要旨を述べる。

株成されており、以下、各章ごとに要旨を述べる。

区分し、概述している。この中で、西日本では、「集落(遺跡)群の性格と領域に関する研究」「定住集落の成立に関する研究」の四つの分野に構造に関する研究」「集落(遺跡)群の性格に関する研究」「集落の移動落研究の課題」で、東日本も含めた縄文集落研究史を、「集落の形態・「第1章 西日本縄文集落研究の意義」では、「第1節 西日本縄文集

八八八

述べる。 課題 に関する研究」「集落の移動と領域に関する研究」が先行し、 利用に関する視点を組み込んだ点、に本論の特色がある、と述べる。 象に着目して、 そのうち、 諸現象の評価 る研究」が着手された、 1 ?評価 成立に関する研究」がこれに次ぎ、 は四つあり、 西日本を主題とした点、 「第2節 季節移動の有無に関する定住性の評価、 小規模集落群、 に関して検討を加えることが必要だと述べ、本論では 資料の集成が進んだ関西地方を中心に分析を進める、 環状集落等の定説的な集落構造の評価、 本論の構成と意義」では、各章の概要と関係を概述し、 と述べる。そのうえで、 季節移動の有無、 (2)数量的分析を重視した点、(3) 近年、「集落の形態・構造に関 定住集落の展開に伴う諸現 西日本縄文集落研究の 定住集落の展開に伴う 小規模集落群 「定住集落 資源 لح

を示し、 に位置する集落がまず成立し、その後、その中間に沖積平野が広がる「景 観A」に集落が広がることを明らかにしている。 における事例研究」で、当該地域を六地域に分け、三三八遺跡の分布と あると結論づけている。 西地方の縄文遺跡の特色」 の点については 都盆地、 縄文遺跡」では、 消長を記載している。 第2章 住居面積合計の変化を加味して、 奈良盆地、 関西地方の縄文遺跡の様相_ 関西地方の代表的集落遺跡を概観し、 九州地方や中四国地方と比較しながら、 生駒山西麓の各地域の遺跡数の推移が共通すること そして、沿岸部と山間部が近接している「景観B でさらに論じ、 は、 西日本全体で共通する傾向が 人口の推移を論じている。 「第1節 「第2節 琵琶湖周辺、 琵琶湖周辺地域 「第3節 関西地方の ح 京 関

Aに集落が形成される「第2段階 縄文早期後葉〜縄文中期中葉」では、復するには距離がある「景観A」の資源利用のあり方を問題にし、景観節 定住集落の成立過程」で、沖積平野をはさんで沿岸部と山間部を往「第3章 遺跡や遺構から見た関西地方の縄文集落の特色」は、「第1

貯蔵穴 群単機能型) 面積、 みが少数存在する遺跡、 現れているか、という点を分析している。 的差異」では、 平野に定住していた、 野に集落を設定し、 後葉」以後、 相について、 など住居以外が群集する遺跡、2群多機能型B)と小規模単機能型 が出現するが、それは後期中葉以後、 も中期後葉以後拡大しており、 跡での組み合わせの様相)である。 秋冬は植物質食料の獲得に好都合だからである。「第3段階 秋冬は山間部に住居を異動させていたと推定している。春夏は水産資源 貯蔵穴、埋葬遺構、 (貯蔵手段)、 であり、 遺物から見た関西地方の縄文集落の特色」は、 西日本の他地域、 貯蔵穴と丸木舟が発達し、 このような生活様式の変化が実際の遺跡や遺物にい 沿岸部と山間部との間を往復しながら、 丸木舟 後期前葉に一部、 と論じている。 1群単機能型A) 祭祀具)と集落構成 (交通手段) および関東地方との比較を論じている。 集落構成は、基本は小規模単機能型 集落規模については、 大規模単機能型 「第2節 に分かれる、 が未発達であり、 大規模多機能型 沿岸部と山間部との間の沖積平 分析対象は、 (住居、 集落景観の変化 貯蔵穴、 と述べる。 (貯蔵穴、 いずれの点から 集落規模 春夏は沿岸部 (2群多機能型 「第 1 節 埋葬遺構の遺 中 縄文中期 間 埋葬遺 (住居 と地 の沖 住居 かに

磨製石斧のいずれもが、 いことを示し、 と関係する可能性が高い打製石斧や、 増加することを論じている。 丸木舟と釣針について全国的な見地から検討を加え、特に第3段階以後、 定住の進行と関係すると述べている。 中期後葉」にはバランスのとれた複合・総合型が増えると論じており、 〜縄文中期中葉」までは一器種突出型が多いものの、 器組成」で関西地方の各遺跡の石器組成が、「第2段階 第4章 逆に堅果類の貯蔵穴が多いことに違いを見出せる、 関西地方では北陸 「第3節 耕作地を伐採する工具とみてよ 「第2節 打製石斧と磨製石斧」 ・東海地方と比べて量が少な 漁撈関連遺物」では 「第3段階 縄文早期 は、 とし 石

ことが大規模環状集落が存在しない要因になった、と結論付けている。があることから、集約的な労働を行う必要が東日本よりも乏しく、このている。しかも、西日本の堅果類の収穫時期は東日本より分散する傾向

期後葉以後、完全な定住集落となるが、それまでは、 て、堅果類の収穫時期にみられる東西差を問題にしている。ようするに、 会である、という社会の性格の相違に起因すると述べる。この理由とし 節移動を行う場合があったと結論づける。小規模集落群および定住集落 する部分である。 本来的な生産性の相違に起因するものではない、 せる社会であり、 の展開に伴う諸現象の評価については、 関西地方における定住集落の成立と展開」は、 季節移動の有無に関する定住性の評価については、 東日本は集団の結束を強めることで生産性をあげる社 西日本は世帯の自律性を優先さ と結論づけている。 景観に応じて、 結論に相当 中

論文審査の結果の要旨

ごとの変化も明確に描出されている。このように、本論文は個別の分析 的なものとしては例がなく、 連させる研究も少なくない。 住居から行う研究は数多い。また、そこに墓や貯蔵穴など他の遺構を関 価は各審査委員が言及した。集落研究を遺跡の住居構成や住居規模など、 をよく総合させているという点に第一の特色があり、この点に関する評 各種遺物の数量や構成に関する分析は、よく関係づけられており、 バランスよく分析している。 落研究において、 本論文は、 その分析を総合化する、という手法はこれまでの研究では本格 西日本縄文集落を遺跡、 一つのモデルともなりうるものと評価できる その点、個性的であると同時に、 しかし、 遺跡の規模や構成、 遺構、 各種遺物を含めて、 遺物の各側面から総合的に 各種遺構の規模や構成、 それぞれ分析 今後の集 時期

第二の特色は分析資料の独自性である。各種の分析は著者がフィール

立命館大学大学院文学研究科博士論文審査要旨

う、 して、 いが、 解である。この数量的分析は、 この研究だけではなく、 あるいは著者がはじめて分析したものであり、その点、 絶対量ではなく、 また、分析の仕方にも工夫が見られ、 基礎としなければできないので、その意味で、労力を要する分析である。 いる。その分析の基礎データも明示されており、著者の主張の根拠が明 数量が明確に示され、 のである。このように、基礎的な資料集成という側面からの価値がある 今後、他地域の同様のデータ集成が進めば、比較分析に資するはずのも 住居面積、 木舟は著者が全国的に集成しており、その集成の意義は大きい。 かつ最新の成果を反映している。琵琶湖周辺地域の遺跡集成については、 的に利用している。分析対象の資料の多くは著者自らが集成したものか 者が積極的に参加した関西縄文文化研究会の資料集成活動の成果も積極 ドとする琵琶湖周辺地域の遺跡集成を基盤とするものであり、 第三の特色は分析における数量的側面の重視である。 配慮されている。この点、 一人あたりの量を把握できるように、 明解で分かりやすく、 貯蔵穴容量、 住居一棟に対する値を提示するなど、 しかも図や表の形で一覧できるように工夫され 他の研究者に広く研究資料として活用できるよ 打製石斧や磨製石斧の数量に関するデータは 説得力がある。数量的分析は、 高度な統計学的手法を使ったものではな 資料集成としての価値も高い。また、丸 遺物の量の推移を比較する場合 工夫してい 人口増減に配慮 各種の分析では 独自性が高い。 同 さらに、 時に著

期中葉、 数量が大きく増加する第3段階に、 季節移動を行う場合が見られるので、 からみた数量的な推移を明らかにしている。 変化を明らかにした点である。(1) 早期前 第四の特色は、 (3) 中期後葉~晩期後葉の三時期に分け、 西日本縄文集落に関して、 定住集落が普遍化する、 人口が増大し、 その結果、第2段階までは ・中葉、 縄文時代を通じた歴史的 $\widehat{2}$ 各種遺構や遺物の 遺跡、 早期後葉~中 遺 と見なして 構、

本論は、研究の基礎に数量的データがあるため、説得力がある。が、西日本のデータに基礎をおいた歴史的理解を示した研究は少ない。いる。これまで、縄文時代全般の歴史的推移を論じることは多くあった

ては、 リンズの学説に依拠しながら、 るとした。この点については、議論が分かれる点であるが、著者はM・サー 的ではない点をあげ、 化の傾向が西日本に見られることから、 本的に異なっていることを指摘した。同時に、堅果類の収穫時期の分散 磨製石斧の量が、 をおこない、原始的な農具の可能性のある打製石斧や、 言及される説となりうるものと評価できる。 いては逆に非常に多いことを数量的に示し、 縄文集落の具体的様相との比較から説明した点である。 第五の特色は、 打製石斧、 磨製石斧、 関西地方において非常に少ないかわりに、 西日本縄文集落が一般的に小規模である理由を東日本 このことが集落の大規模化に向かわない要因であ 貯蔵穴について、北陸、 試論を展開している。今後の議論で必ず 労働編成が東日本に比べて集約 植物質食料の獲得手段が根 東海地方との比較 森林を伐採する この点につい 貯蔵穴につ

について、概念を提示すべきである。 合、それを定住社会と呼ぶかどうか、という問題がある。著者はこの点地域に定住する集団と定住していない集団が混在する状況を説明する場り概念を季節移動の有無に限って用いるとしても、著者のように、ある判が示された箇所があるので、明記しておきたい。まず、「定住」とい以上が、各審査委員の評価を総合したものであるが、疑問点および批

していない。この点は過去の著者の議論と異なる部分であるだけに、よる定住集落の成立については当初から定住的であったとみなして、説明当初から主体的であった景観B(沿岸部と山間部が近接する地域)におけまた、著者は定住化の進行を、景観A(沖積平野をはさんで沿岸部と山また、著者は定住化の進行を、景観A(沖積平野をはさんで沿岸部と山

り詳細に説明を加える必要がある。

九〇

る石器組成の偏りの有無について詳しく分析を加えるべきである。 いま者が季節移動を想定している景観Aと想定していない景観Bにおけいまれの偏りを季節移動の根拠とみなす見方は困難であるし、少なくと器組成の偏りを季節移動の根拠とみなしているが、この分析については、 (季節的に生業活動が異なる) とみなしているが、この分析については、 さらに、 遺跡ごとに石器組成の偏りが見られる現象を季節移動の根拠

全般的に影響を与える問題として、著者は食料獲得手段を交換ではない。この理由について、著者は主要食料を交換すると、非常にない。この理由について、著者は主要食料を交換するとなると、非常にの交換は想定できないと述べた。しかし、この点については議論の余地の交換は想定できないと述べた。しかし、この点については議論の余地の交換は想定できないと述べた。しかし、この点については議論の余地の交換は想定できないと述べた。しかし、この点については議論の余地の交換が推定されているのに、食料については、そのように考えている。石材等、活会をしている。

という点で、審査委員は同意した。一致した。また、全体として十分に博士論文としての水準に達しているについては、今後の研究にゆだねたい、ということで審査委員の意見はこのように、いくつかの点で疑問をはさむ余地があるものの、この点

試験または学力確認の結果の要旨

対し、 時40分まで2時間に及ぶ審査を、 お 実施した。 いて提出し、 審査委員会は二〇〇八年七月二十七日 的確に応答した。また、 傍聴者は6名である。 適正であったため本学学位規程第二十五条第一項により 審査委員会に論文要旨を英語、 審査にあたっては、 学芸員課程実習展示室にお $\widehat{\mathbb{H}}$ 午前8時40分から午 審査委員の試問に 中 ,て厳 -国語に 前

これに関わる試験の全部を免除した。

(文学 立命館大学)の学位を授与することを適当と認めるものである。以上、総合的に判断して、本学学位規程第十八条第二項により、博士

木股知史

『画文共鳴『みだれ髪』から『月に吠える』へ』

学位の種類 博 士 (文学)

授与年月日 二〇〇八年九月十二日

審查委員

主査 木 村 一 信

副査中川成美

副査 澤 正 宏

論文内容の要旨

ジと文学とが響きあって作り出す表現世界のことを指している。の対象としている。論文題目の「画文共鳴」という言葉は、視覚的イメーの言語表現と交流し共鳴することによって作り出される美の領域を研究本論文は、書物、雑誌における挿絵や装幀などの美術的要素が、文学

に至る流れを取り上げている。『みだれ髪』から『月に吠える』の系譜を文学の共鳴を意図したさまざまな試みを行った。本論文は、与謝野晶と文学の共鳴を意図したさまざまな試みを行った。本論文は、与謝野晶と文学の共鳴を意図したさまざまな試みを行った。本論文は、与謝野晶と文学の共鳴を意図したさまざまな試みを行った。本論文は、与謝野晶と文学の共鳴を意図したさまざまな試みを行った。本論文は、与謝野晶と文学の共鳴を意図したさまざまな試みを行った。本論文は、与謝野晶と文学の共鳴を意図したさまざまな試みを行った。本論文は、与謝野晶と文学の共鳴を意図したさまざまな試みを行った。本論文は、与謝野品と文学の共鳴を意図したさまざまな試みを行った。本論文は、与謝野品と文学の表現史の上で、視覚的イメージと文学が共鳴する試みが活発に展開された時期で上で、視覚的イメージと文学が共鳴する試みが活発に展開された時期で上で、視覚的イメージと文学が共鳴する試みが活発に展開された時期で上で、視覚的イメージと文学が共鳴する試みが活発に展開された時期で上で、視覚的インは、日本近代文学の表現史の

できるからである。 な姿を現し、表現が重層的な意味を獲得していく過程を見いだすことがには、視覚的表現と文学表現が交錯しながら、近代的な内面性が実質的

なコンテクストの中でとらえようと試みるものである。 文はモチーフの一つとしている。すなわち、文学史をより広い文化史的 学に関連する領域を視野に含めて文学表現の歴史を捕らえることも本論 視覚的表現の基盤をなす印刷技術や、画家と文学者の交流といった、文 術の協働は、それ自体一つの表現であるととらえることができる。また、 学表現に新たな意義が生まれる。 画といった視覚的イメージが関与している。そのイメージは、 的 重要な要素の一つと見なせる。 な言語だけで成りたっているのではない。雑誌や書物には、 雑誌や書物というかたちをとって世に送り出される文学作品は、 つまり、 視覚的イメージが関与することで、 書物や雑誌における文学と美 文学表現 装幀や挿 抽象

像は、 取りあげ、この歌集は、 斬新なスタイルを生み出した。 画集の源流をなすと位置付ける。 の表紙画の意味について考察している。藤島武二が描いた表紙画の女性 と文学の共鳴を積極的に推進したことを論じる。 という美術館」と題されている。 伝統的要素を踏まえながらも、 ナスを暗示する表紙画の女性像は、 を重視した与謝野鉄幹は、 覚的イメージと文学の協働の諸相を分析している。 本論文は、三部立て、九章から構成されている。第Ⅰ部は、「『明 日本の伝統と、 新たな美の規範を生み出した。第三章では、歌集 西洋とが融合した独特の美を表現していて、 イメージと文学の交流の最高の結実であり、 西洋美術が近代化の規範を示すと考え、 そして、 西洋のアール・ヌーヴォーを取り入れて、 第一章では、雑誌 藤島の担当した装幀や挿絵は、 『明星』の文学理念と内的な関連 晶子の短歌に重層的な意味が加 第二章では、 視覚イメージの効果 『明星』における視 『みだれ髪』 日本の ヴィー 明 美術 星 星 詩 を

検証している。でさまざまな視覚効果が探求されて、創作版画の起点ともなったことをでさまざまな視覚効果が探求されて、創作版画の起点ともなったことを『明星』誌上に掲載された木版や石版などの印刷技法を取り上げ、そこわり、象徴主義的な文学表現の可能性を生むことになった。第四章では、

なく、 繁とともに、 る、 は、 とによって可能になったのである。 達成として評価できるが、それは、 ようと考えたのである。 を与える。蒲原は、言葉の写実性を超え、 の詩集 の蒲原有明を取り上げている。 新たな絵画と文学の融合を指摘できるとする。また、 ることによって、 第Ⅱ部 上田敏による西欧の象徴詩の翻訳、 従来の象徴主義の理解を再検討している。 西洋絵画を理解する際の理念の表現という系譜を踏まえることで 『夕潮』の挿絵や、 「イメージと象徴主義」 詩と絵画を協働させる試みを実験した。 近代日本の象徴主義の再評価を試みている。 蒲原の散文詩は、 絵画「海の幸」によって、 ロゼッテイに学んだ蒲原は、 では、 文学への絵画の影響を内在化するこ 紹介を契機として成立したとす 美術と文学の交流を視野に含 意識の世界そのものを表現し 近代日本における象徴主義の 暗示という修辞法だけで 第六章では、 蒲原に大きな影響 青木は、 藤島や青木 第五章で 岩野泡鳴

学と美術の共鳴に自覚的であった田中を論じている。 前 俳 挿絵を手がけた恩地孝四郎や田中恭吉に影響を与えた。夢二のコマ絵は、 よる新たな表現の可能性を開拓した。それが、 二を論じる。 メージとの関連を考慮しながら分析を進めている。 見なせる萩原朔太郎の『月に吠える』について、 一画の伝統を異化するという側面があり、 衛的な表現へと変えていったのである。第八章では、 第Ⅲ部 「詩画集への道」では、はじめての本格的な意味での 夢二は、 コマ絵集の刊行によって詩歌と絵画の組み合せに 恩地や田中は、 『月に吠える』の装幀や 装幀や挿絵の視覚的イ 第七章では、 第九章では、 出発当初から文 それを斬新で 詩画集と 詩集

のである。 のである。 のである。 のである。 のである。 のである。 を補完し、 視覚的イメージと詩の言語とが 交感してはじめて作り出され という視点から考察されている。 萩原の幻覚をとらえた詩と、 のである。

論文審査の結果の要旨

審査結果は、主査・副査の意見をあわせて記すと以下の通りである。まで、末川会館第二会議室において公開で行われた。本論文についての本論文の審査は、二〇〇八年七月四日(金)、午後3時から4時50分

交流、共鳴しあっていることを探りあてている。実証的に「画」と「文」とが緊密に、ある場合には内的に深く関連し、たしている役割を追究している。多くの和洋の資料や先行研究にあたり、論者は、むしろ「画家」の側に重点を置き、「画」が「文」に対して果脇役もしくは無視してとらえられることが多かった。本論文において、店関しての文学研究では、「文」(言語表現)に対し、「画」(装幀や挿絵)は、これまで、日本の近代詩歌分野における雑誌や著作(詩歌誌や詩歌集)

とを掘り起こしていった手腕は、見事であると言える。 は「画」としていったこうした論点に鍬を入れ、新しい解釈と事実認めているが、「文学と美術が相互に刺激を与えあって独特の表現領域認めているが、「文学と美術が相互に刺激を与えあって独特の表現領域に画」として独立しているものであり、論者も基本的にはこの考えをとを掘り起こしていった手腕は、見事であると言える。

本論文は、三部、九章から成るが、雑誌『明星』や歌集『みだれ髪』

立命館大学大学院文学研究科博士論文審查要旨

版印刷との違い、また、それぞれがもっている特色、 が必要であった。 られているが、この点に関してはやや説明不足であり、 考察を中心とする第Ⅱ部(第五章、第六章)、 の考察を中心とした第Ⅰ部 見解を示している。 ての言及がなされていて、 幹が、「西洋化を近代の根拠とする」方向へと変わって行く経緯が述べ 見に富み、優れている。ここでは、かつて国粋主義者であった与謝野鉄 がおもに 係にあった一條成美と藤島武二それぞれの画の特色と、この二人の 体からみてもっとも紙数を費やしている第Ⅰ部では、 を中心とした第Ⅲ部(第七章から第九章)という構成である。 『明星』で「文」と相俟って果たした意義についての解明が卓 第Ⅰ部の最後において、「画」における木版印刷と石 「画家」の理解を深くするうえでもすぐれた (第一章から第四章)、 詩集『月に吠える』の考察 日本近代の象徴主義 当時、 可能性などについ より詳しい論 競合する関

中恭吉の 釈とを基盤にして、内面の表現の深いところから詳細に論じられていて、 験そのものの直接的な表現へと、文語象徴詩を経て散文詩に転換して も新しい。 説得力がある。詩に表現されている「草木姦淫」や、 という詩史的な問題にも踏み込んでの論述が欲しかったところである。 についても触れられているが、欲を言えば、 追究している。ここでは、 いった経緯を、 スラーの 蒲原有明の象徴主義の本質を解明する。そして、蒲原の象徴主義がホイッ 第Ⅱ部では、草創期の日本近代詩における象徴主義の第一人者である 第Ⅲ部では、 画 「画」との 本論文の、 の影響を受け、これと「共鳴」しながらしだいに内的経 詩集『月に吠える』における、萩原朔太郎の「文」と田 夢(無意識)や幻想といったキー・ワードをもとにして 「共鳴」 一達成がここに見受けられる。 蒲原の詩人としての近代詩への発展の可能性 が、 (言語表現) 蒲原の象徴主義からの脱れ の分析と挿絵の深い 竹 の解釈など

代日本の表現史上の大事な論点もあるからである。

代日本の表現史上の大事な論点もあるからである。

代日本の表現史上の大事な論点もあるからである。

代日本の表現史上の大事な論点もあるからである。

代日本の表現史上の大事な論点もあるからである。

代日本の表現史上の大事な論点もあるからである。

れる。今後の研究に強い影響力を持つであろう。見と示唆に富み、詩歌研究、表現史研究に多大な足跡を残す成果と思わとはいうものの、本論文は、これまでの研究には見られない多くの卓

試験または学力確認の結果の要旨

第一項により、これに関わる試験の全部を免除した。 第一項により、これに関わる試験の全部を免除した。 第一項により、これに関わる試験の全部を免除した。 第一項により、これに関わる試験の全部を免除した。 第一項により、これに関わる試験の全部を免除した。 第一項により、これに関わる試験の全部を免除した。 第一項により、これに関わる試験の全部を免除した。 第一項により、これに関わる試験の全部を免除した。 第一項により、これに関わる試験の全部を免除した。

とを適当と認める。 程第十八条第二項により、博士(文学 立命館大学)の学位を授与するこ程第十八条第二項により、博士(文学 立命館大学)の学位を授与するこ審査委員会は、以上の諸点を総合的に判断し、申請論文は本学学位規